

西分増井遺跡群

- 医療施設増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

高知市文化財調査報告書
第46集

二〇二二年三月

2022. 3

高 知 市

高
知
市

西分増井遺跡群

－医療施設増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2022. 3

高 知 市



弥生土器甕 (8)



弥生土器甕 (9)



弥生土器鉢 (14)



須恵器杯蓋 (37)



須恵器堤瓶 (27)



綠釉陶器椀 (21)



土師質土器土錘 (29)



石器石斧 (17)

序

高知市の南西部に位置する春野町とその周辺は、仁淀川によって形成された沖積平野にあります。豊かな自然に恵まれたこの地域は古くから農業生産が盛んな地域であり、縄文時代後期、弥生時代から古代～中世の人々の営みを伝える西分増井遺跡群を筆頭に、竹ノ内遺跡、山根石屋敷遺跡、奥屋敷遺跡、大寺廃寺跡、馬場末遺跡、太用遺跡などの集落跡が確認されてきました。

この度、病院施設の増築に伴い発掘調査が実施されました。調査では、古代～中世の遺構群と遺物包含層が確認され、土坑、溝、ピットなどの遺構を検出することができました。

この報告書が高知市の歴史を理解する上で何らかの役割を果たし、また、地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。

最後に、調査の実施に当たり、炎天下の中、発掘作業に従事して下さった発掘作業員の方々、及び調査に全面的な御協力を頂きました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

令和4年3月

高 知 市

例　　言

- 1 本書は、高知市教育委員会が令和元年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査対象地は、高知市春野町に所在する。
- 3 調査期間と調査面積は次のとおりである。資料整理、報告書作成は令和元年度から2年度にかけて行った。

　　試掘調査 令和元年5月7日～5月9日　調査面積 27m²

　　発掘調査 令和元年6月17日～7月17日　調査面積 215m²

調査体制は以下のとおりである。

　　調査主体 高知市教育委員会

　　調査事務 同 民権・文化財課指導主事 松浦誠仁

　　調査担当 同 民権・文化財課指導主事 西村一法

- 4 本書の執筆は西村一法、浜田恵子が行い、執筆は下記の様に分担した。編集は綾部美輪が行った。遺物写真は梶原瑞司が撮影した。

　　I～IV章（西村）・V章（浜田）

- 5 調査にあたっては、医療法人水島会、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
- 6 遺物の資料調査については、出原恵三、下村裕（高知県教育委員会文化財課）、池澤俊幸（高知県文化財団埋蔵文化財センター）をはじめとする諸氏のご教示を賜った。
- 7 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

　　【発掘作業】岡崎速男 尾崎角美 武内順一 武内昌子 西村道明 西村末廣

　　【測量補助】片岡和美

　　【整理作業】櫻尾洋子 島村加奈 和田エリ

- 8 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度についてでは世界測地系の数値を使用している。
- 9 遺構の略号は、掘立柱建物跡：SB、土坑：SK、溝：SD、柱穴及び小型の穴：Pとした。
- 10 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市が保管している。注記の略号は「19-H N」である。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
第Ⅲ章 試掘調査	4
第Ⅳ章 調査の方法	6
第Ⅴ章 調査の成果	
1 節 基本層序	9
2 節 遺構と遺物	11
1 弥生時代後期の遺構と遺物	
(1) 焼土集中	11
(2) 包含層出土遺物・その他の遺物	11
2 古墳時代後期～中世の遺構と遺物	
(1) 捜立柱建物跡	14
(2) 土坑	15
(3) 溝	15
(4) ピット	22
(5) 包含層出土遺物・その他の遺物	24
3 近世・近代の遺構と遺物	
(1) 溝	24
(2) 包含層出土遺物・その他の遺物	26

挿図目次

- Fig. 1 西分増井遺跡群調査区位置図
- Fig. 2 西分増井遺跡群及び周辺の遺跡
- Fig. 3 TP1～3セクション図
- Fig. 4 調査区風景
- Fig. 5 調査区位置図・試掘坑配置図
- Fig. 6 検出遺構全体図
- Fig. 7 基本層序
- Fig. 8 焼土集中1平面図・セクション図
- Fig. 9 焼土集中1出土遺物実測図（1）
- Fig.10 焼土集中1出土遺物実測図（2）
- Fig.11 IV層・表面採取出土遺物実測図

- Fig.12 SB1平面図・エレベーション図
Fig.13 SK1～4平面図・セクション図
Fig.14 SD2・3・5～7・9平面図・セクション図
Fig.15 SD2・3出土遺物実測図
Fig.16 SD4・8・10・11平面図・セクション図
Fig.17 SD4出土遺物実測図
Fig.18 SD5出土遺物実測図
Fig.19 P4・21・22・26・27・30平面図・セクション図・エレベーション図
Fig.20 SD2・3・5・6～8・11・P22・27出土遺物実測図
Fig.21 II・III・IV層・SD1出土遺物実測図
Fig.22 SD1平面図・セクション図
Fig.23 SD1・II層・搅乱層出土遺物実測図

表目次

- Tab.1 遺構一覧表（SK・焼土集中）
Tab.2 遺構一覧表（溝）
Tab.3 遺構一覧表（SB）
Tab.4 遺構一覧表（ピット）
Tab.5 SBピット計測表
Tab.6～10 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）
Tab.11 遺物観察表（石製品・金属製品）
Tab.12 遺物観察表（瓦）
Tab.13 遺物観察表（古錢）

写真図版目次

- 卷頭図版1 弥生土器甕・壺・鉢・須恵器杯蓋・堤瓶・綠釉陶器椀・土師質土器土錘・石器石斧
PL.1 調査前風景、完掘状況
PL.2 完掘状況、調査区東壁
PL.3 焼土集中1遺物出土状況、焼土集中1土層断面、SD2土層断面、SD3・5土層断面、
SD4・8土層断面、SD3遺物出土状況、SD3遺物出土状況、SD5遺物出土状況
PL.4 焼土集中1出土遺物
PL.5 焼土集中1・I区IV層・II区表採・SD3出土遺物
PL.6 SD3～5出土遺物
PL.7 SD5出土遺物
PL.8 SD2～8・11・P22・27・TP3III・IV層・I区II層出土遺物
PL.9 I区II層・SD1搅乱・SD2・3・5搅乱・I区搅乱・II区搅乱出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

西分増井遺跡群は高知市春野町西分に所在している。当遺跡は、昭和52（1977）年から平成14（2002）年まで5度にわたる発掘調査の結果、縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が検出されており、高知県中央部では浦戸湾以西を代表する大規模な拠点集落に位置付けられている。

特に平成13・14（2001・2002）年の調査では弥生時代の集落跡のほか、銅鐸や中国鏡・銅矛などの破片、大量の鉄製品と、生産地であることを示す鍛冶場遺構も確認され、遺跡の重要性は増している。

令和元（2019）年、遺跡の範囲内において医療法人の病院施設増改築が計画され、遺跡内の開発の届出が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に提出された。これを受けて、地権者及び開発者の同意のもとに、令和元（2019）年5月7日より遺跡の有無及び範囲確認のための試掘確認調査を行うこととなった。試掘調査では古代～中世の遺物包含層と遺構が検出された。この結果を受けて、地権者である医療法人永島会、高知県教育委員会と高知市が協議を行い、建設予定地において高知市教育委員会が主体となり発掘調査を実施することとなった。本調査は令和元（2019）年6月17日～7月17日にかけて実施した。



Fig.1 西分増井遺跡群調査区位置図

(S=1/2,500)

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

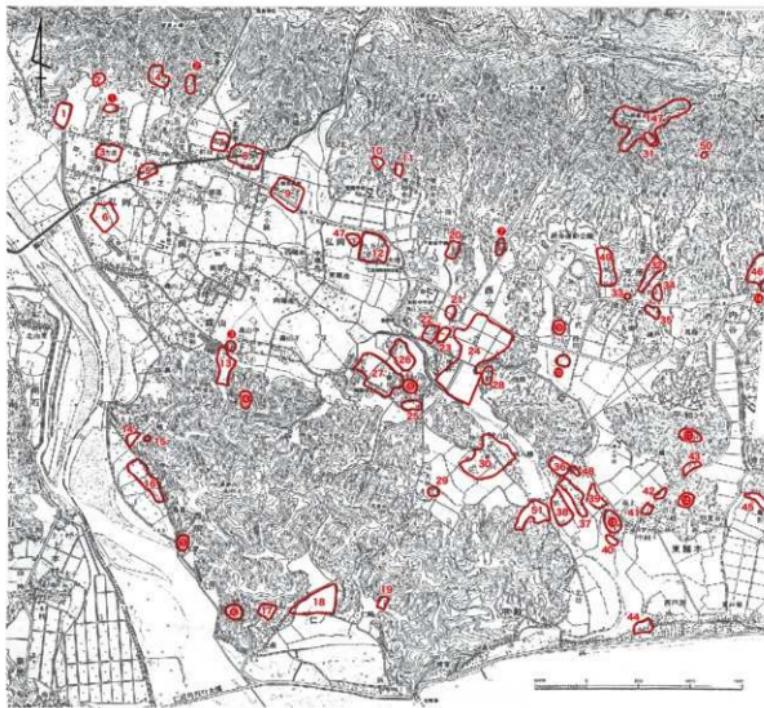
1 地理的環境

高知県は四国の南部に扇状に広がり、北は四国山地に隔てられ、他の三方は海に面している。四国4県の中では最も人口が少なく、面積においては四国最大だが森林の占める割合が高くなっている。

本市西端を流れる仁淀川は標高1,982mの四国の靈峰石鎚山に源を発する高知県第二の河川である。昔より水害の多い河川として、その支流である新川川とともに流れを変化させてきた。西分増井遺跡群がある高知市春野町は、仁淀川とその支流によって形成された堆積平野で、旧中洲、自然堤防、後背湿地などの微地形が入り組んでいる。北側の山脈から派生する山脚が隨所に形成され、浸食谷と山脚の微高地とが複雑な地形を成している。微高地上は集落の営まれるところとなっており、浸食谷の深い低湿地も圃場整備が進み、盛土により園芸ハウスなどに活用され、現在はきゅうり、なす、トマト、メロンなどの施設園芸が盛んである。現存する長谷、根本谷、大谷などの字名に深田の名残を留めている。西分増井遺跡群は新川川左岸に形成された自然堤防上に立地している。

2 歴史的環境

西分増井遺跡群及びその周辺部においては、縄文時代後期にまで歴史を遡ることができる。山根遺跡は縄文時代後期～中世まで続く複合遺跡で、昭和48（1973）年から昭和55（1980）年にかけて4次にわたる学術調査と2次の緊急調査が行われている。遺構は確認されていないが、後期末葉の松ノ木式土器や石器が出土している。西分増井遺跡群では平成2（1990）年に圃場整備事業に伴う調査で、縄文時代の土坑9基とピット19個以上が確認され、後期中葉の片船式土器、広瀬上層式土器及び石鏸、磨製石斧、打製石斧、石錐、石棒等の石器が出土している。さらに平成13・14（2001・2002）年に実施した新川川広域河川改修工事に伴う調査では、弥生時代～古墳時代の堅穴住居、鍛冶関連遺構が確認され、弥生土器、古式土師器、銅鐸、銅矛、銅戈、中国鏡、仿製鏡、鉄器・鉄片等が出土している。これらは高知県の平野部では田村遺跡群に次ぐ規模であり、その重要性が指摘されている。続いて王子遺跡では平成3（1991）年に行われた調査で、縄文時代後期末～晩期前半の土器片が出土している他、北川内遺跡において晩期中葉の資料がみられる。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
24	西分増井遺跡群	縄文～中世	22	大寺施寺跡	古代	45	亀湖道跡	古代
1	難島遺跡	中世	23	馬場末遺跡	縄文～中世	46	田中遺跡	弥生～中世
2	奥谷道跡	弥生	25	八王寺跡	中世	47	東江曲道跡	弥生
3	古市道跡	中世	26	山根道跡	縄文～中世	48	北川内道跡	弥生～中世
4	吉良星徵跡	中世	27	和田・片廻道跡	縄文～中世	49	芳原西之谷道跡	古墳
5	西ノ芝道跡	不明	28	小野道跡	中世	50	大芝道跡	近世
6	天皇道跡	中世	29	大谷道跡	古代	51	梅ノ木谷道跡	縄文～近世
7	後田道跡	弥生	30	秋山道跡	弥生～中世	52	柏尾山城跡	中世
8	王子道跡	弥生～近世	31	觀正寺跡	不明	①	八幡宮西の城跡	中世
9	大小路道跡	弥生～近世	32	下室屋道跡	古代～中世	②	吉良城跡	中世
10	西谷道跡	古墳・古代	33	篠道跡	弥生	③	森山城跡	中世
11	妙音寺道跡	中世	34	東ノ原北道跡	古代～中世	④	森山南城跡	中世
12	久方道跡	弥生～中世	35	東ノ原南道跡	弥生～中世	⑤	西畠城跡	中世
13	二ノ町道跡	不明	36	松本道跡	弥生～中世	⑥	仁ノ城跡	中世
14	大上道跡	不明	37	竹ヶ鼻道跡	弥生～中世	⑦	木塚城跡	中世
15	フケ道跡	弥生	38	小鳥道跡	古代～中世	⑧	秋山城跡	中世
16	西側道跡	弥生～古墳	39	安後道跡	不明	⑨	坊ヶ森城跡	中世
17	芳見ヶ谷道跡	不明	40	南浦道跡	古代	⑩	芳原城跡	中世
18	仁ノ道跡	弥生～古墳	41	中船道跡	中世	⑪	光津城	中世
19	久保田道跡	不明	42	北船道跡	中世	⑫	東諸木城跡	中世
20	ヒヨ谷道跡	弥生	43	小原坂道跡	弥生～中世	⑬	御ヶ森城跡	中世
21	太用道跡	弥生～中世	44	西口原道跡	弥生～中世	⑭	内ノ谷城跡	中世

平成4年高知市教育委員会「高知市春野町区域 周知の遺跡と中世の城跡」をもとに加筆

Fig. 2 西分増井遺跡群及び周辺の遺跡

第Ⅲ章 試掘調査

1 調査の方法

今回の調査では、工事予定範囲（増築棟建設工事）のうち、既存建物、樹木が現存する範囲を除いて、地下の調査が可能な駐車場部分を中心に3箇所の試掘坑を設定した。(Fig.5) 各試掘坑の規模はTP1: 3×3m, TP2: 3×3m, TP3: 3×3mである。

2 試掘調査の結果

試掘坑TP1～3内の各堆積層からは中世～近世の遺物が出土し、包含層も確認できた。以下試掘坑ごとに検出遺構及び出土遺物について述べる。

TP1 (Fig.3)

調査区北部に設定した試掘坑で、表土下(1.43m)の深さまで確認した。I層：明黄褐色砂礫層で、その下にII層：褐灰色粘土質シルト層、その下にIII層：褐色粘土質シルト層が堆積しており、このIII層下面が中世の遺構検出面となる。さらにその下面にIV層：暗褐色粘土質シルト、V層：黒褐色シルトが堆積している。検出された遺構は、SD1・SK1である。

遺物は、III層から甕・壺・須恵器片、SD1の北壁から近世の陶器片、攪乱からは甕片が出土した。

TP2 (Fig.3)

調査区中央部に設定した試掘坑で、表土下(1.52m)の深さまで確認した。堆積状況はTP1とはほぼ同様で、検出された遺構は、SD2・3である。SD2は東西確認長(0.80m)南北確認長(2.43m)、SD3は東西確認長(0.50m)南北確認長(2.32m)である。

遺物は、III層から中世の羽釜片、SD3からは古代～中世の須恵器片が出土した。

TP3 (Fig.3)

調査区南部に設定した試掘坑で、表土下(1.80m)の深さまで確認した。堆積状況はTP1とはほぼ同様で、遺構の検出には至らなかった。

遺物は、III層・IV層から中世の三足鍋片や須恵器片が出土した。

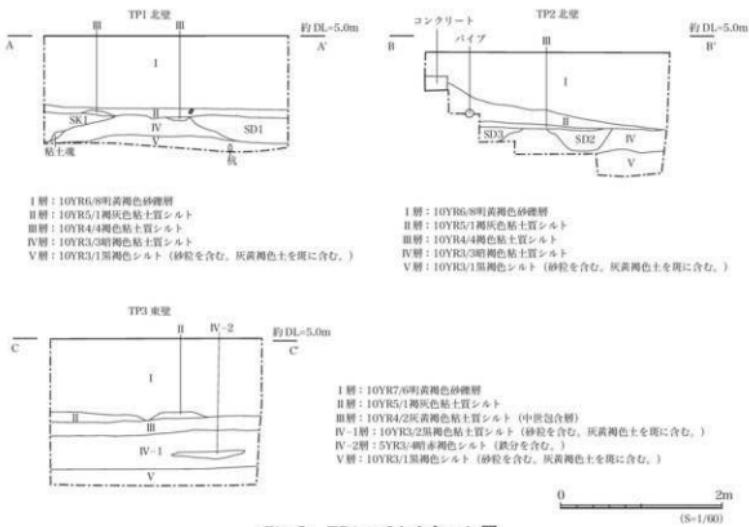


Fig.3 TP1 ~ 3セクション図

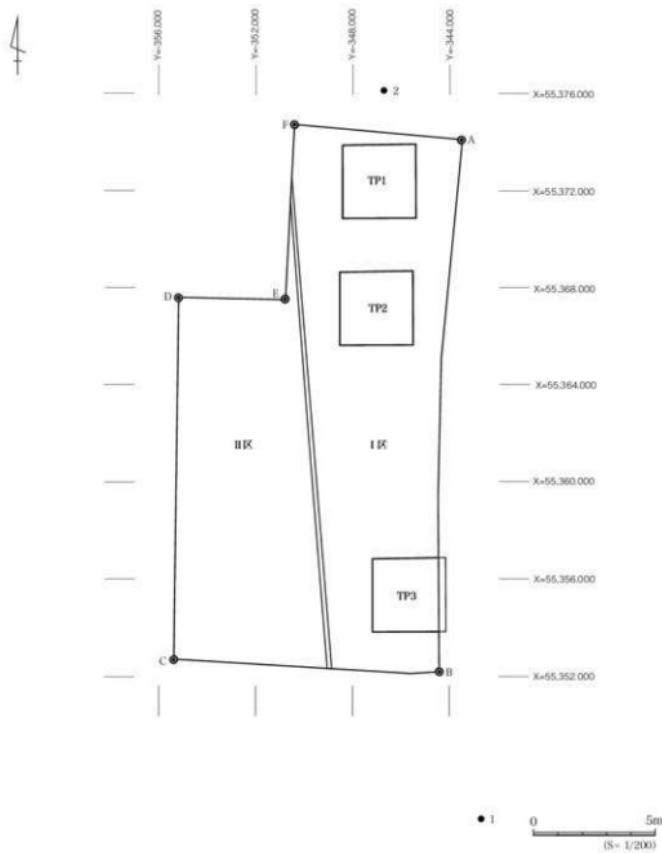
第IV章 調査の方法

今回の調査では、工事予定範囲のうち既存建物、樹木が現存する範囲を除いて、地下の調査が可能な範囲に調査区を設定した。擾乱層と整地層の掘削は重機を用い、遺構検出と遺構掘削は人力により調査を進めた。

調査区のⅡ区においては、浄化槽や用水路・下水管等の設置に伴う擾乱が著しかったが、Ⅰ区においては、遺物包含層が場所により残存しており、Ⅱ・Ⅲ層とⅣ層の2面において遺構検出を行った。検出された遺構については、土層図と平面図を作成し、土層観察を行うとともに写真撮影を行った。調査終了後は、埋め戻しによる現状復旧作業を行った。



Fig.4 調査区風景



基準点	X 座標	Y 座標
1	55,346,231	-342,786
2	55,376,161	-346,783

測点	X 座標	Y 座標
A	55,374,065	-343,542
B	55,374,672	-350,495
C	55,367,563	-350,825
D	55,367,602	-351,159
E	55,352,752	-356,280
F	55,352,226	-345,651

Fig. 5 調査区位置図・試掘坑配置図

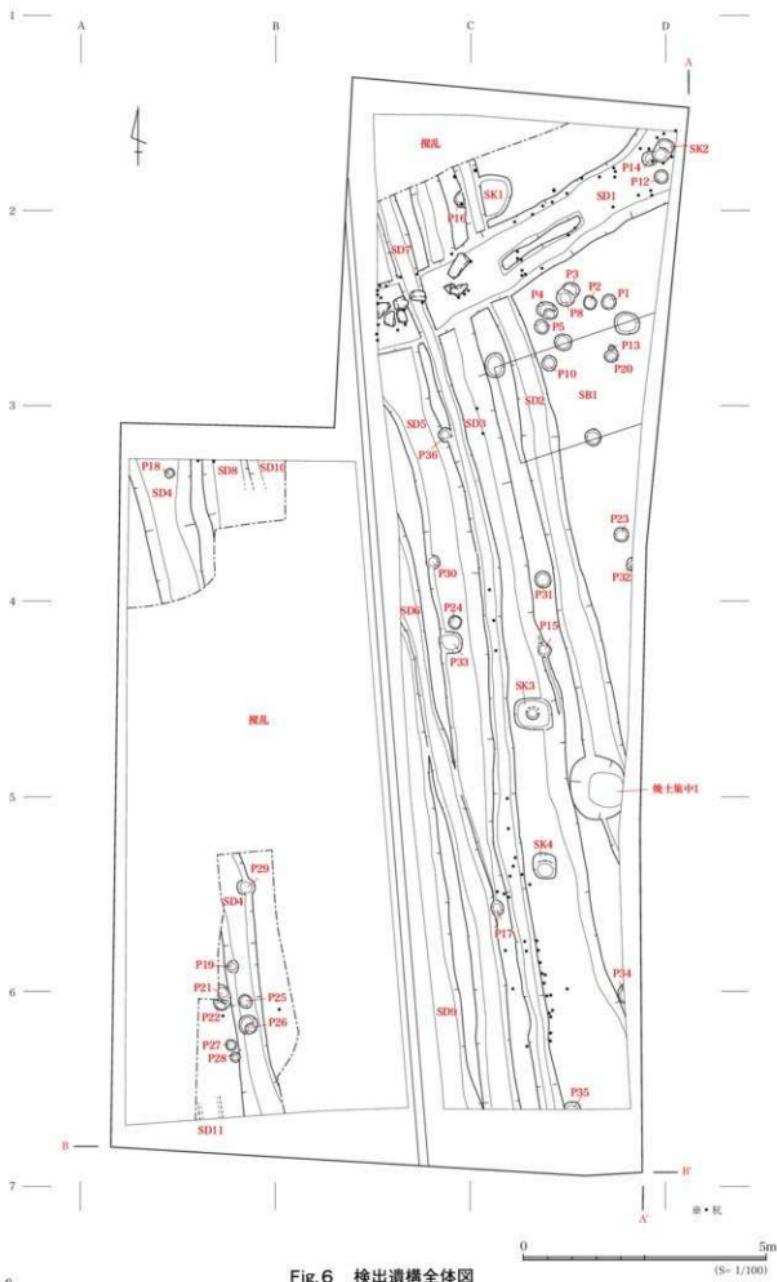


Fig. 6 検出遺構全体図

第V章 調査の成果

第1節 基本層序 (Fig.7)

基本層序は調査区の東壁と南壁にて観察した。堆積層の概要は次の通りである。

- I層：10YR6/8明黄褐色礫層（角礫を多く含む。）
 - I-1層：5YR6/8橙色礫層（3～20cm大の礫を多く含む。）
 - II層：7.5YR5/1褐灰色粘土質シルト
 - III層：10YR4/4褐色粘土質シルト
 - IV層：10YR3/3暗褐色粘土質シルト
 - V-1層：10YR3/1黒褐色シルト質粘土、V-2層：5YR3/4暗赤褐色シルト（鉄分を含む。）
 - VI層：10YR2/1黒褐色シルト質粘土（シルトに砂粒を含む。）
 - VII層：10YR4/6褐色粘土質シルト
 - VIII層：10YR2/2黒褐色粘土質シルト（シルトに砂粒を含む。）
 - IX層：10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト
- I層は近現代の整地層である。II層は近世の遺物包含層で粘土質シルトを基調とし、礫と橙色土粒を含んでいる。
- III・IV層は粘土質シルトを基調としており、古代～中世の遺構検出面となる。
- V-1層はシルト質粘土を基調とし、これより以下は無遺物層である。V-2層はシルトを基調としており、鉄分を含んでいる。VI層はシルト質粘土を基調としており、砂粒を含んでいる。VII層は粘土質シルトである。VIII層は粘土質シルトを基調としており、砂粒を含む。IX層は粘土質シルトである。
- II層からは、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器などが出土している。
- III層はI・II層によって殆ど削平されているが、残存している所では、中世を主体とした遺物が出土している。IV層からは、弥生土器、土師器、須恵器細片が出土している。

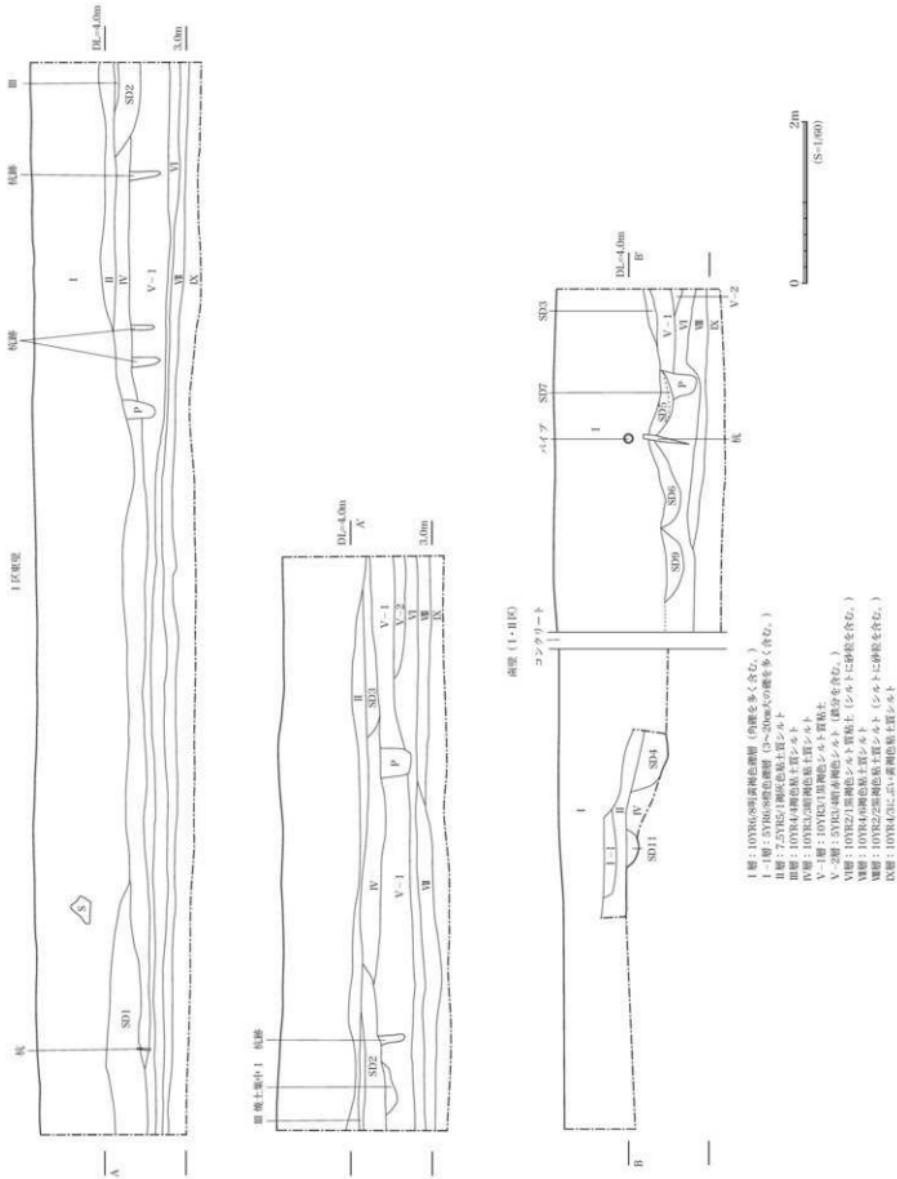


Fig. 7 基本層序

第2節 遺構と遺物

今回の調査では、土坑4基、溝11条、ピット35個、焼土集中が1箇所検出された。時期が判別できないものもあるが、遺物は弥生時代後期・古代～中世に属するものが多い。

調査区ではⅡ・Ⅲ層の多くがⅠ層によって削平されているため、遺構検出はⅢ層～Ⅳ層上面で行った。調査区西部は現在の建物の基礎による削平及び排水管が埋設されているため、殆ど掘削することができなかった。

1 弥生時代後期の遺構と遺物

弥生時代の遺構は未検出であるが、調査区南東部の焼土集中1で弥生時代後期の土器がまとまって出土している。また、Ⅳ層からも弥生時代の遺物片が少量出土しており、近隣に該当期の集落が存在していたことが窺える。

(1) 焼土集中

焼土集中1 (Fig.8～10)

調査区南東部に位置する焼土集中で、SD2の下面で検出した。平面形は楕円形を呈し、東西確認長1.02m、南北長1.22m、深さ23cmである。埋土は褐灰色粘土質シルトである。

出土遺物は弥生土器壺・甕・鉢、及び古代の混入とみられる土師器壺・甕である。出土点数は口縁部及び底部点数にして、弥生土器壺4点・甕9点・鉢1点、及び古代の混入とみられる土師器壺3点・甕3点であり、その他、弥生土器の体部片が多く出土している。

図示したものは、弥生土器壺（1・2・11・12）、甕（3～10・13）、鉢（14）である。

5は口縁端部を下方に摘み出しヨコナデを施す。頸部内面に粘土帶接合痕を明瞭に残す。7は胴部外面にタタキ目。肩部内面に粘土帶接合痕が残る。6・8は胴部内面にヘラケズリを施す。11・12は壺の底部で、平底。13は突出状の底部をもち、外面ナデ、下位にタタキ目が残る。14は鉢の底部で、上げ底になっている。

(2) 包含層出土遺物・その他の遺物

包含層出土遺物 (Fig.11)

弥生時代の遺物は、IV層より出土している。

図示したものは、IV層出土の甕（15・16）、表土層出土の石斧（17）である。15は平底の甕で、上胴部内面にヘラケズリを施す。16は甕で、口縁

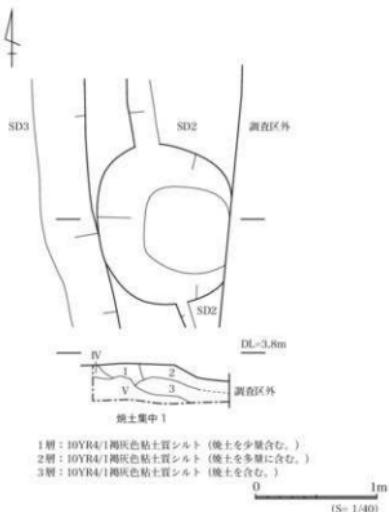


Fig. 8 焼土集中1平面図・セクション図

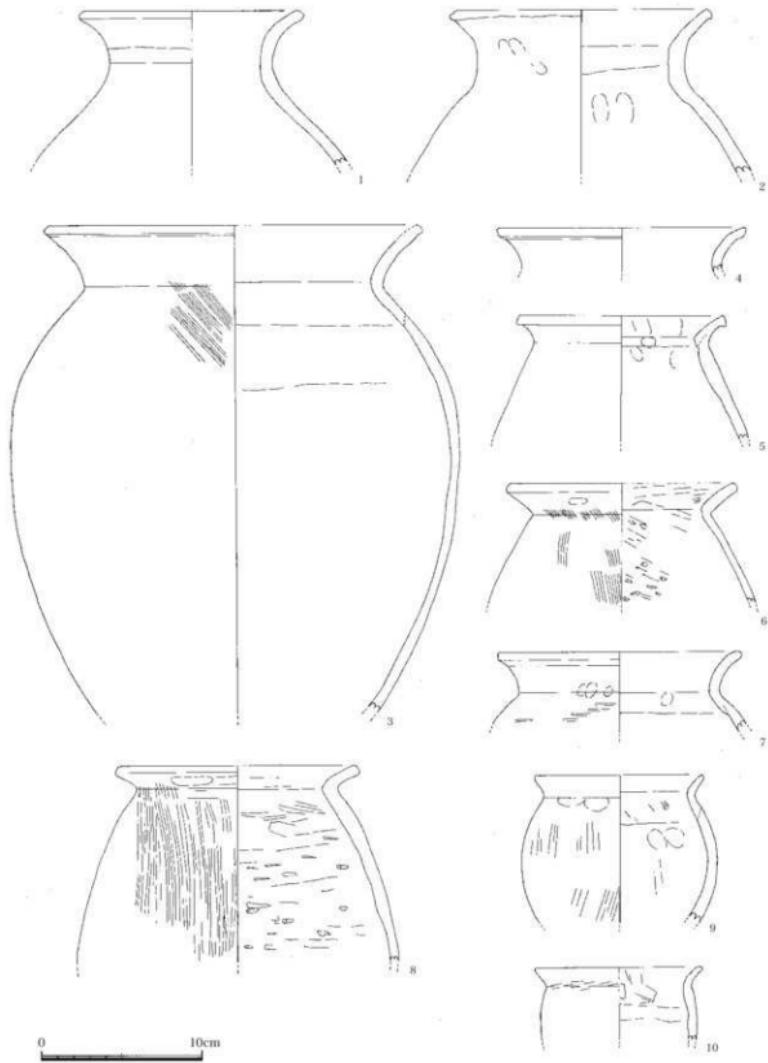


Fig. 9 燃土集中1出土遺物実測図 (1)

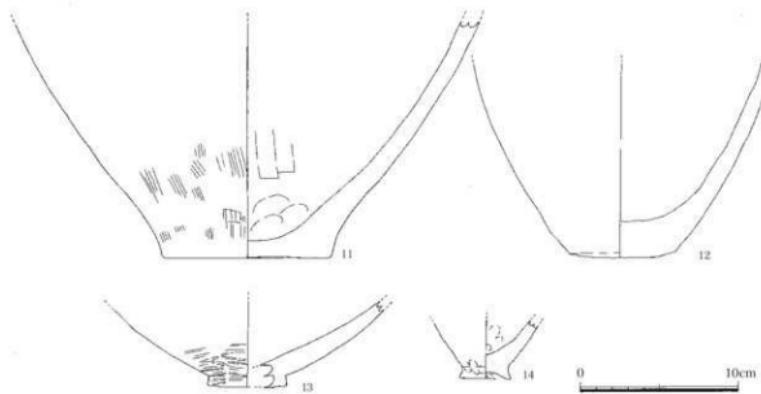


Fig. 10 焼土集中1出土遺物実測図 (2)

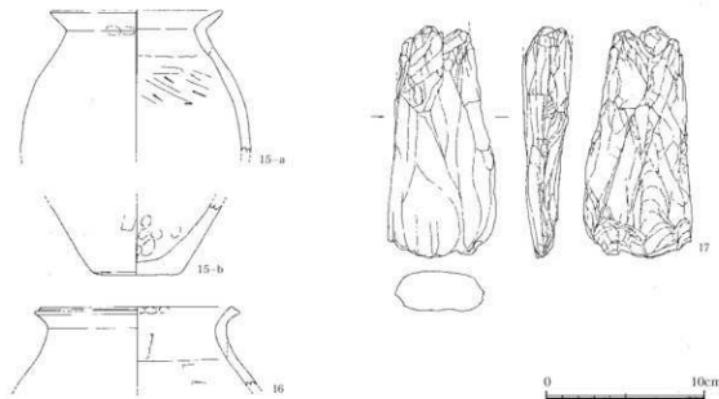


Fig. 11 IV層・表面採取出土遺物実測図
(IV層: 15a ~ 16、表面採取: 17)

端部は摘み出して強くヨコナデを施す。内面に粘土帯接合痕が残る。17は頁岩製の打製石斧である。

2 古墳時代後期～中世の遺構と遺物 (Fig. 6)

古代～中世の遺構検出は、II層の下面（調査区南部にて標高3.90m前後）と、III層の下面～IV層上面（調査区南部にて標高3.80m前後）で行った。古代～中世の遺構は、土坑4基、溝11条、ピット35個を検出している。

古墳時代の遺構は未確認であるが、後世の遺構内や包含層から古墳時代後期の遺物が多く出土しており、該当期の集落が近隣に展開していたことが窺える。

(1) 挖立柱建物跡

SB1 (Fig.12)

I 区北部で検出された1間×2間、又は桁行2間以上の東西長棟建物跡で、N=18°Wの棟方向をもつ。他遺構との切り合い関係では、未検出のP6がSD2に切られた可能性がある。

検出規模は梁行1間(2.02m) 桁行2間(2.80m)である。柱間寸法は梁行が2.02m、桁行が1.45～1.48mである。桁行2間以上とした場合は、桁行4m以上である。

柱穴は4基を検出している。柱穴の規模はP1が長軸50cm、短軸40cm、深さ23cm、P2が径35cm、深さ10cm、P3が長軸52cm、短軸46cm、深さ11cm、P5が径34cm、深さ5cmを測る。埋土はいずれも灰黄褐色粘土質シルトである。

遺物はP1から中世の土師質土器杯又は皿の体部細片、古代の須恵器皿の底部1点、須恵器細片、土師器壺の体部細片、P2から古代の須恵器細片、土師器細片が出土している。

SB1は中世に比定される。

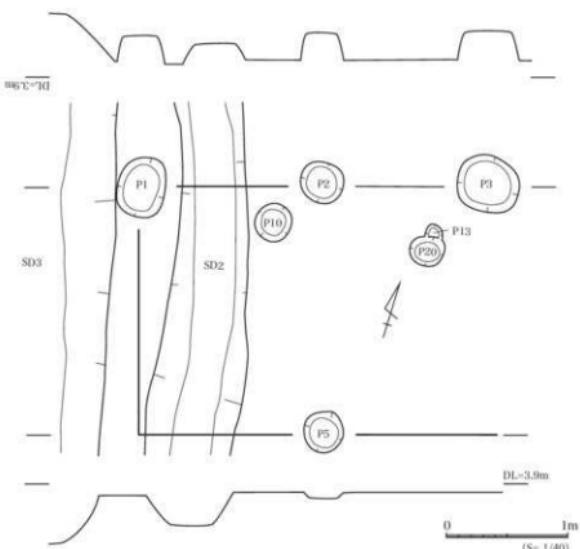


Fig.12 SB1平面図・エレベーション図

(2) 土坑

SK1 (Fig.13)

I 区北部に位置する土坑で、II・III層下面で検出した。切り合い関係ではSD2を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.80m、深さ15cmである。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、須恵器細片、鉄片1点である。SD2との前後関係から、SK1は中世に位置付けられる。

SK2 (Fig.13)

I 区北部に位置する土坑で、SD1の下面で検出した。他遺構との切り合い関係では、P14を切り、SD1に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸0.50m、短軸0.38m、深さ25cmである。埋土は暗褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、土師質土器小皿の底部1点である。SK2は中世に比定される。

SK3 (Fig.13)

I 区中央部に位置する土坑又は大型の柱穴で、SD3の下面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.78m、短軸0.63m、深さ30cmである。床面では径27cmの柱痕を検出している。埋土は暗褐色シルトで、柱痕埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、土師器、須恵器細片、及び弥生土器片である。

SK4 (Fig.13)

I 区南部に位置する土坑で、SD3の下面で検出した。平面形は方形を呈し、長軸0.53m、短軸0.47m、深さ37cmである。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、弥生土器細片である。

(3) 溝

SD2 (Fig.14・15)

I 区東部、II層下位で検出した南北方向の溝で、SD3～10と並行している。軸方向はN-10°Wである。他遺構との切り合い関係では、P16・焼土集中1を切り、SK1・SD1に切られる。検出長は14.92m、検出規模は幅0.45～0.77m、深さ26～35cmである。床面は北部で標高3.47m、南部で標高3.71m前後である。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、古代の土師器口縁部1点・底部2点、須恵器口縁部3点・底部2点、中世の土師質土器口縁部2点・底部2点、及び弥生土器の口縁部2点、近世の混入とみられる磁器口縁部1点、陶器細片である。

図示したものは、中世の土師質土器杯(18)・小皿(19)、古代の須恵器杯(20)である。

SD2は中世に比定される。

SD3 (Fig.14・15)

I 区中央部、II層下位で検出した南北方向の溝で、SD2・4～10と並行している。軸方向はN-8°Wである。他遺構との切り合い関係では、SK3・4・SD7を切る。検出長は19.81m、検出規模は幅0.60～1.15m、深さ25～34cmである。床面は北部で標高3.35m、南部で3.43m前後である。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

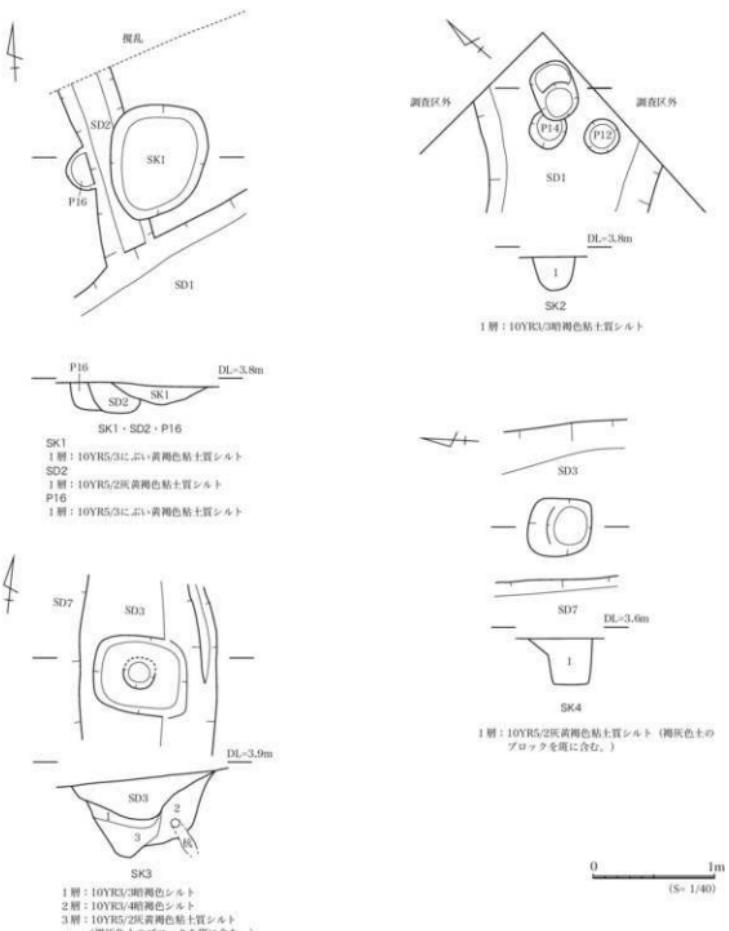


Fig.13 SK1 ~ 4平面図・セクション図

出土遺物は、土師質土器杯又は皿の口縁部3点・底部2点、土師質土器土錐2点、須恵器杯又は皿の口縁部8点・底部6点・蓋2点・杯身1点、綠釉陶器椀の口縁部1点、鉄片1点、土師質土器細片、弥生土器細片、及び近世の混入とみられる陶器擂鉢又は捏鉢である。

図示したものは、中世の土師質土器土錐（28・29）、古代の綠釉陶器椀（21）、須恵器杯蓋（24）、

須恵器高杯 (25)、須恵器甕 (22・23)、須恵器提瓶 (26・27) である。21は綠釉陶器碗で9～10世紀。内外面に灰オリーブ色の釉を薄く施す。24は須恵器杯蓋で、6世紀後半。25は須恵器高杯の脚部で、脚部中央に1条の凹線が巡らされ段状を呈する。22は須恵器甕で6世紀。口縁部は玉縁状を呈する。頭部外面にカキ目が残る。23は須恵器甕で6～7世紀。口縁部外面が幅1cmの粘土帯により段状を呈する。26・27は須恵器提瓶で、6世紀。体部外面に右→左のヘラケズリを施す。把手は形骸化する。SD3は中世に比定される。

SD4 (Fig.16・17)

II区西部、I層下位で検出した南北方向の溝である。調査区全体が削平を受けており部分的にしか確認することができなかったが、南北方向の溝SD2・3・5～10と並行している。軸方向はN-10°-Wである。他遺構との切り合い関係では、P18・19・25・26を切り、P21・28に切られる。またP29と切り合う。検出長は8.34m、検出規模は幅0.60～1.00m、深さ35～80cmである。床面は北部で標高3.47m、南部で標高3.51m前後である。埋土は暗褐色シルト質粘土である。

出土遺物は、土師器口縁2点、須恵器口縁5点・底部5点・蓋1点・脚部1点、土師質土器口縁40点・底部29点、瓦質土器1点、青磁2点、陶器口縁4点と細片である。

図示したものは、中世の土師質土器杯 (30・31)、土師質土器小皿 (32)、土師質土器皿 (33)、古代の土師器杯 (34)、須恵器碗 (35)、須恵器杯蓋 (37)、土師器ミニチュア土器 (36)、古墳時代後期の須恵器杯蓋 (38)、土師器甕 (39) である。

30・31は杯で、外底回転糸切り。外面に多段のロクロ目が残る。32は小皿である。33は皿である。30～33は中世の土師質土器である。34は土師器杯で、10世紀である。外底ヘラ切り、ヘラミガキを施す。35は須恵器碗である。貼付高台をもつ。37は須恵器杯蓋である。扁平な宝珠摘みを貼付する。38は須恵器杯蓋で6世紀後半である。39は土師器甕で6世紀である。

SD4は中世に比定される。

SD5 (Fig.14・18)

I区西部、II層下位で検出した南北方向の溝で、SD2～4・6～10と並行している。軸方向はN-14°-Wである。他遺構との切り合い関係では、SD7・P17・24・30・33を切り、SD1に切られる。また、SD6との前後関係は不明である。検出長は19.18m、検出規模は幅0.90～1.35m、深さ21～32cmである。床は北部で標高3.38m、南部で標高3.42m前後である。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、土師器口縁6点・底部6点、須恵器口縁8点・蓋1点・底部11点、東播系口縁1点、綠釉口縁1点、青磁4点、白磁口縁1点・底部1点、陶器底部1点、磁器口縁1点、土師質土器1点・土錐1点、土師質土器細片である。

図示したものは、中世の青花碗 (40)、青磁碗 (41・42)、白磁皿 (44)、陶器碗 (43)、陶器擂鉢 (45～47)、須恵器捏鉢 (48)、土師質土器杯 (49)、土師質土器土錐 (50)、鉄製品 (61・62)、古代の白磁碗 (51～53)、須恵器杯 (54・55)、須恵器鉢 (56)、古墳時代後期の須恵器甕又は壺 (57)、須恵器杯 (58)、須恵器甕 (59)、土師器甕 (60) である。

SD5は中世に比定される。

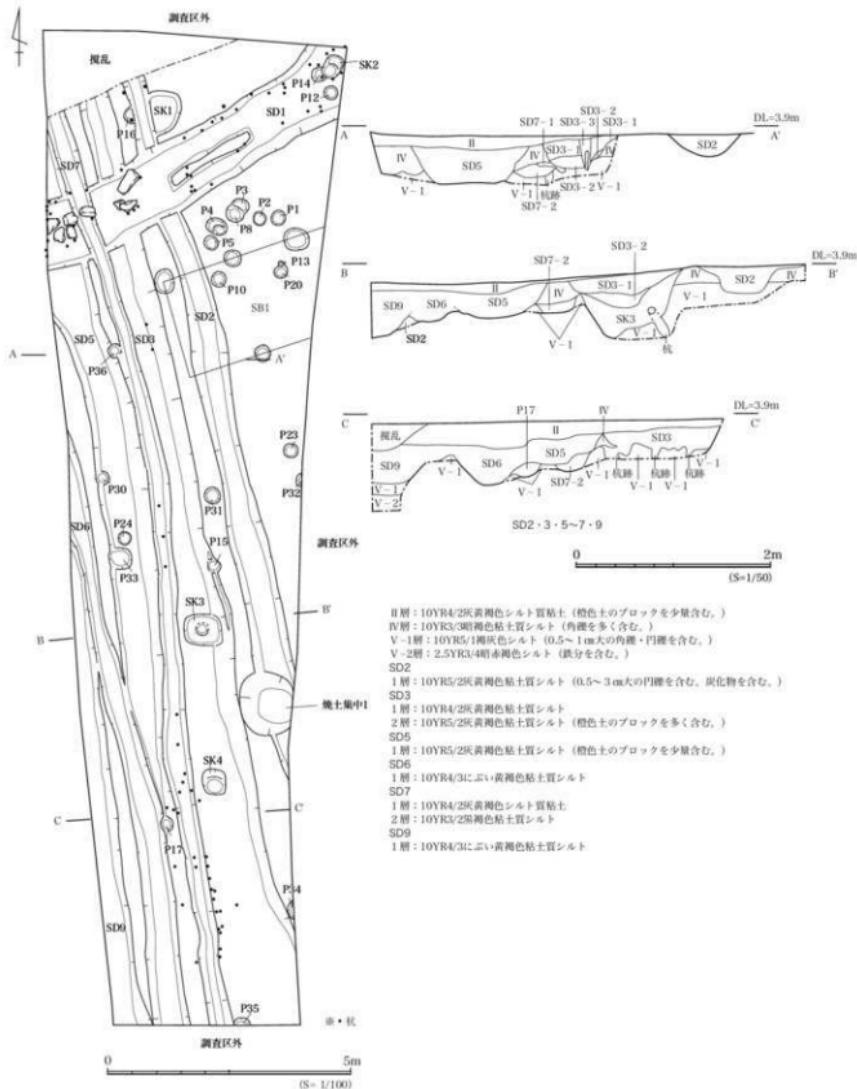


Fig.14 SD2・3・5～7・9平面図・セクション図

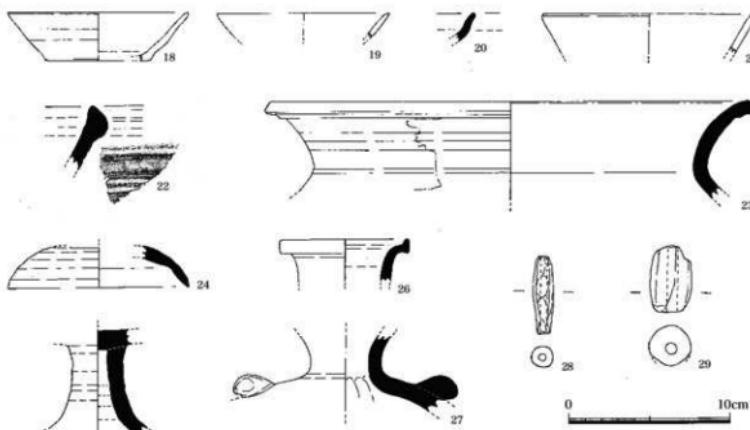


Fig.15 SD2・3出土遺物実測図
(SD2 : 18 ~ 20、SD3 : 21 ~ 29)

SD6 (Fig.14・20)

I区西部、II層下位で検出した南北方向の溝で、SD2～5・7～10と並行している。軸方向はN-14°-Wである。他遺構との切り合い関係では、P17を切り、SD5・9と切り合う。検出長は11.78m、検出規模は幅0.25～0.73m、深さ20～37cmを測る。床面は北部で標高3.38m、南部で標高3.26m前後である。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、須恵器杯1点・脚部1点、青磁1点、土師質土器口縁部1点と細片である。

図示したものは、古墳時代後期の須恵器杯蓋（63）である。

SD6は中世に比定される。

SD7 (Fig.14・20)

I区中央部西、IV層下位で検出した南北方向の溝で、SD2～6・8～10と並行する。軸方向はN-8°-Wである。他遺構との切り合い関係では、SD1・3・5・P35に切られる。確認長は19.65m、検出規模は幅0.30～0.55m、深さ12～14cmを測る。床面は北部で標高3.29m、南部で標高3.34m前後である。埋土は灰黄褐色シルト質粘土である。

出土遺物は、土師器口縁部1点・底部3点、須恵器口縁部5点・蓋1点、鉄片1点と細片である。

図示したものは古墳時代後期の須恵器杯蓋（64）である。

SD7は古代～中世に比定される。

SD8 (Fig.16・20)

II区中央部、I層下位で検出した南北方向の溝で、SD2～7・9・10と並行する。軸方向は、N-10°-Wである。他遺構との切り合い関係では、SD4を切り、SD10と切り合う。検出長は1.50m、検出規模は幅0.75m、深さ18cmを測る。東側溝の肩は殆ど検出することができなかった。埋土は褐色シルト質粘土であるが、埋土の締まりがなく掘り直しされた可能性がある。

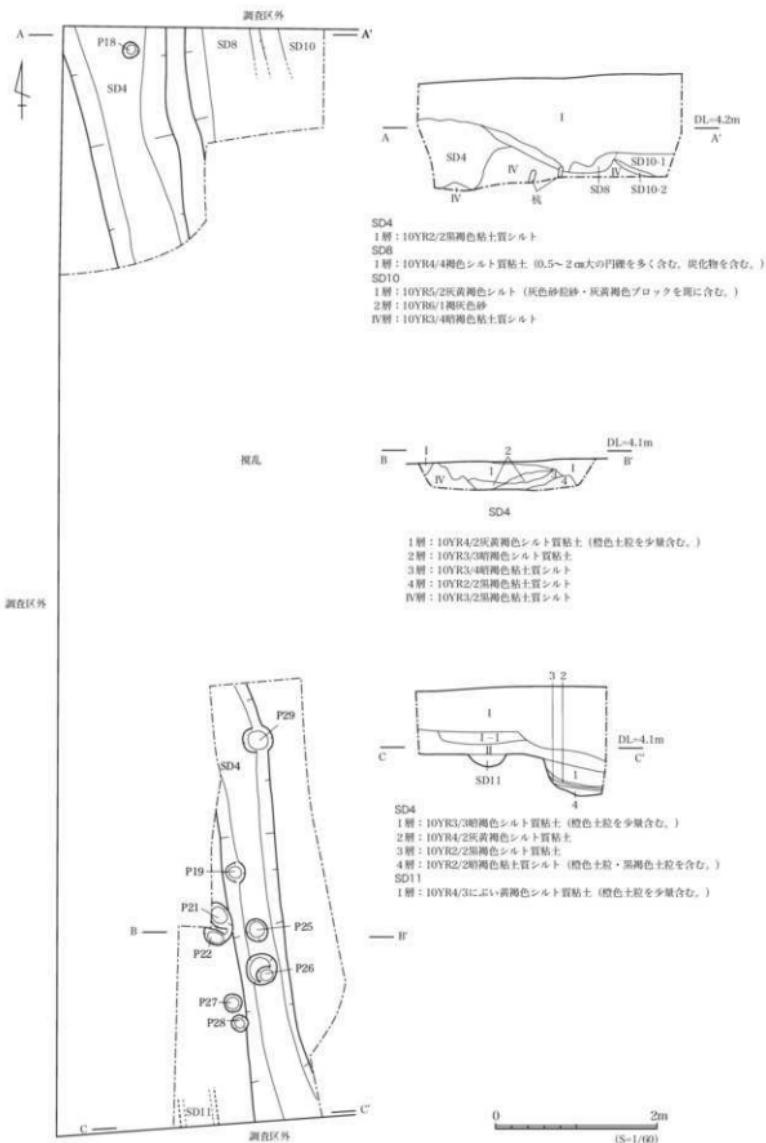


Fig.16 SD4・8・10・11平面図・セクション図

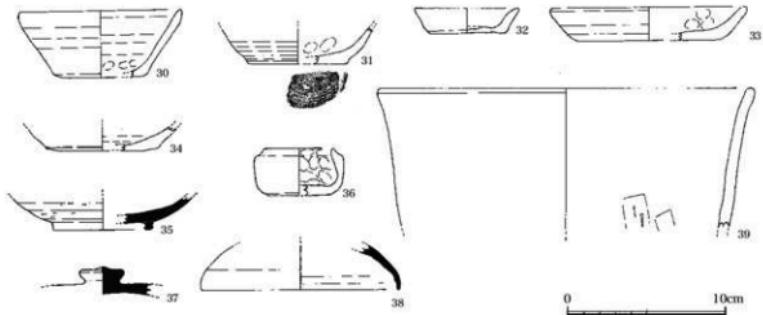


Fig.17 SD4出土遺物実測図

出土遺物は、須恵器提瓶の底部（65）である。

SD4との位置関係等から、SD8は中世に推定される。

SD9 (Fig.14)

I区西部、II層下位で検出した南北方向の溝で、SD2～8・10と並行する。軸方向は、N-10°-Wである。他遺構との切り合い関係では、SD6と切り合う。検出長は10.50m、検出規模は幅0.35～0.50m、深さ45cmを測る。床面は北部で標高3.24m、南部で標高3.26m前後である。西側溝の肩は、現代の排水管が通っているため、下層まで掘削することができなかった。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、緑釉陶器1点、土師質土器口縁1点、須恵器壺の体部である。

SD9は中世に比定される。

SD10 (Fig.16)

II区中央部、I層下位で検出した。南北方向に延びるであろう溝で、搅乱によりほとんど検出することができなかつたため、全体の形態と規模は不明である。他遺構と切り合い関係では、SD8と切り合う。埋土は灰黄褐色シルトであるが、埋土の継まりがなく掘り直しされた可能性がある。東側の肩は、病院からの排水管が通っているため、下層を掘削することはできなかつた。出土遺物は、確認できなかつた。

SD4との位置関係等から、SD10は中世に推定される。

SD11 (Fig.16・20)

II区南部、II層下位で検出した遺構で壁面でしか確認することができなかつたため、全体の形態と規模は不明である。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。

出土遺物は、須恵器壺口縁部1点と体部、土師器体部である。

図示したものは6世紀の須恵器壺（68）である。口縁部外面に段をもち、頸部外面には縱方向の粗いハケを施す。

SD2・3・5～7・9トレンチ (Fig.20・23)

I区の溝の切り合いを確認するために、掘削したトレンチ内からも関連の遺物が出土している。

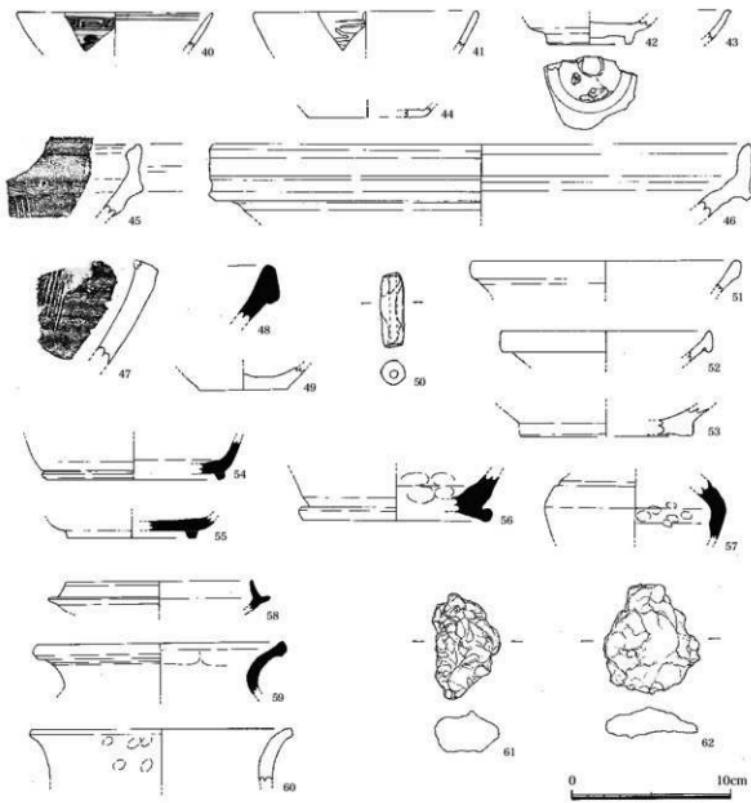


Fig.18 SD5出土遺物実測図

図示したものは、古墳時代後期の須恵器杯（66）、古代又は古墳時代後期の須恵器高杯（69）、近世の備前焼擂鉢（79）である。69は高杯の脚部である。

(4) ピット

ピットは35個を検出した。溝との切り合い関係や出土遺物等から、中世に特定できるものにはP3・5・15・21・28があるが、その他は遺物の出土が確認できなかつたものや、古墳時代後期～古代の遺物のみを確認するものであり、時期を特定できないものが殆どであった。

以下では、良好な遺物出土を示したものや柱痕を検出したピットを取り上げる。その他について概要をピット一覧表（Tab.4）に示している。

P4 (Fig.19)

I区北部、IV層上面で検出した。検出規模は径46×33cm、深さ25cmである。床面で17×14cmの柱痕を検出した。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は古代の須恵器杯又は杯蓋の口縁部1点、土師器壺の体部細片、土師器細片である。

P21 (Fig.19)

II区南部、IV層上面で検出した。検出規模は長軸35cm、短軸25cm、深さ20cmである。床面で25×18cmの柱痕を検出した。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。出土遺物は確認できていない。

P22 (Fig.19・20)

II区南部、IV層上面で検出した。他遺構との切り合い関係では、P21と切り合う。平面形は橢円形で、検出規模は径32×17cm、深さ16cmである。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は、古墳時代後期の土師器壺の口縁部1点と体部細片である。図示したものは、6世紀の土師器壺(70)である。

P26 (Fig.19)

II区南部に位置し、SD4の下面で検出した。切り合い関係ではSD4に切られる。検出規模は径40cm、深さ16cmである。床面で16×13cmの柱痕を検出した。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は土師器壺の体部細片である。

P27 (Fig.19・20)

II区南部に位置するピットで、IV層上面で検出した。平面形は円形で、検出規模は径25cm、深さ20cmである。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

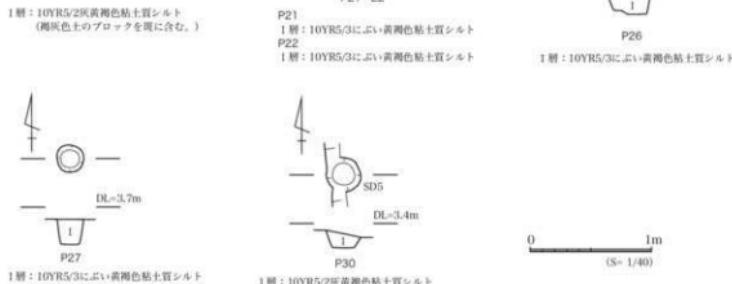
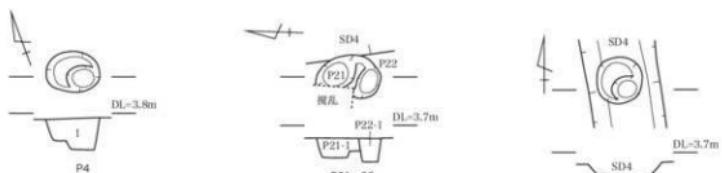


Fig.19 P4・21・22・26・27・30平面図・セクション図・エレベーション図

出土遺物は、古墳時代後期の須恵器杯1点、古代の土師器杯又は皿の底部1点、土師器細片である。図示したものは、6世紀後半の須恵器杯（67）である。

P30 (Fig.19)

I区中央部に位置し、SD5の下面で検出した。切り合い関係ではSD5に切られる。検出規模は径28cm、深さ8cmである。埋土は灰黄褐色粘質土シルトである。出土遺物は確認できていない。

（5）包含層出土遺物・その他の遺物

II・III・IV層・SD1出土遺物 (Fig.21)

II層からは、須恵器、土師器、土師質土器、青磁、陶磁器等が出土している。III層は殆どがI・II層によって削平されており、出土遺物は僅少であった。IV層からは、弥生土器、土師器、須恵器細片が出土している。

図示したものは、II層出土の青花碗（72）、青磁皿（73）、III・IV層出土の鍋（71）である。72は中国景德鎮窯系の青花碗である。外面に唐草文とみられる文様、見込みに圈線と唐草文を描く。73は中国龍泉窯系青磁の端反形皿である。釉は酸化焼成気味でにぶい黄色に発色する。71は土師質土器の三足鍋である。外面に煤が付着している。

また、近世～近代の溝SD1からも古墳時代後期～中世の遺物が出土している。

図示したものは、SD1出土の土師器高杯（75）、須恵器提瓶（76）、陶器擂鉢（74）である。75は高杯の脚部で、5～6世紀。76は須恵器提瓶で6世紀。外面は右→左へのヘラケズリ、内面はユビオサエ、ナデを施す。74は備前産焼締め陶器の擂鉢である。15世紀末である。

3 近世・近代の遺構と遺物

（1）溝

SD1 (Fig.22・23)

I区北部、I層下位～II層上位で検出した東西方向の溝で、N48°-Eの軸をもつ。他遺構との切り合い関係では、SK2・SD2・3・5・P12・14を切る。検出長は6.50m、検出規模は幅1.26～1.64m、深さ15～30cmを測る。床面は東部で標高3.78m、西部で標高3.34m前後である。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。溝の西部では20～30cm大の石（チャート）が多数検出されており、石の前面には石を固定していたと思われる杭が打ち込まれている。

出土遺物は、近世～近代の陶器（78・81・84・85）と硯（86）並びに古墳時代後期～中世の須恵器口縁部1点、土師器口縁部8点、青磁細片1点、須恵器、土師器、土師質土器細片、搅乱層出土の土師器高杯（75）、陶器擂鉢（74）である。

図示したものは、陶器小碗（78）、陶器徳利（84）、器種不明の陶器底部（81）、陶器土管（85）、硯（86）である。78は京都・信楽系の半球形小碗である。灰白色を帯びる透明の釉を施し、外面に鉄絵を描く。18世紀中葉。84は近代の徳利である。外面に酸化コバルトによる文字を描き、灰釉、内面に鉄釉を施す。81は近世末～近代。85は焼締め陶器の土管で、近世末～近代。86は粘板岩製の硯である。外底に釘彫りをもつ。近代である。

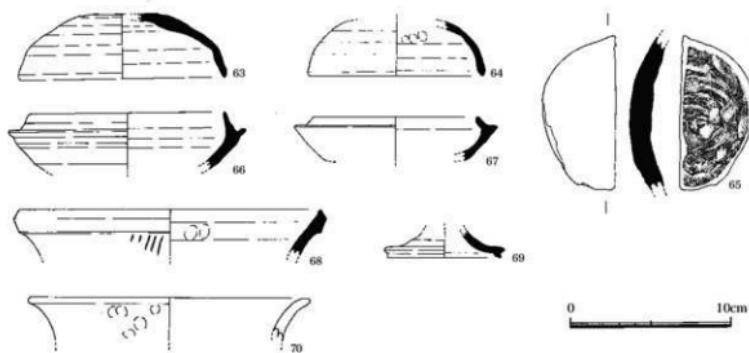


Fig.20 SD2・3・5・6～8・11・P22・27出土遺物実測図
(SD6:63、SD7:64、SD8:65、SD11:68、SD2・3・5:69、SD3・5～7:66、P22:70、P27:67)

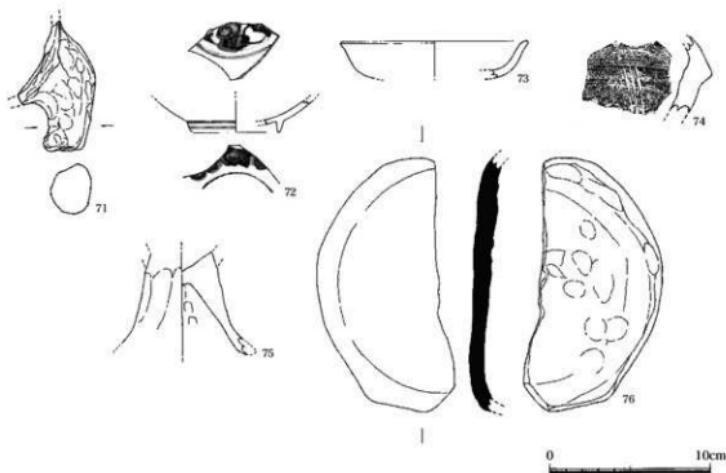


Fig.21 II・III・IV層・SD1出土遺物実測図
(II層: 72・73、III・IV層: 71、SD1: 74～76)

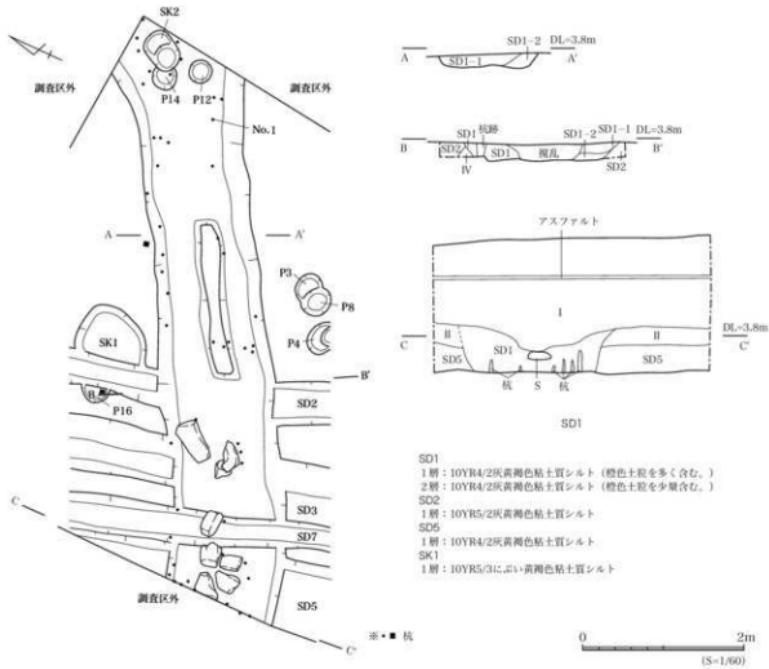


Fig.22 SD1平面図・セクション図

(2) 包含層出土遺物・その他の遺物

Ⅱ層・搅乱層出土遺物 (Fig.23)

近世～近代の遺物は、Ⅱ層と搅乱層から出土している。

図示したものは、Ⅱ層出土の青花小杯(77)、搅乱層出土の磁器染付小皿(83)、磁器小碗(82)、陶器皿(80)、寛永通宝(88)、軒棧瓦(87)である。

その他、中世遺構の搅乱層からも該当期の遺物が出土している。図示したものは、SD2・3・5搅乱層出土の備前産陶器擂鉢(79)である。18～19世紀である。

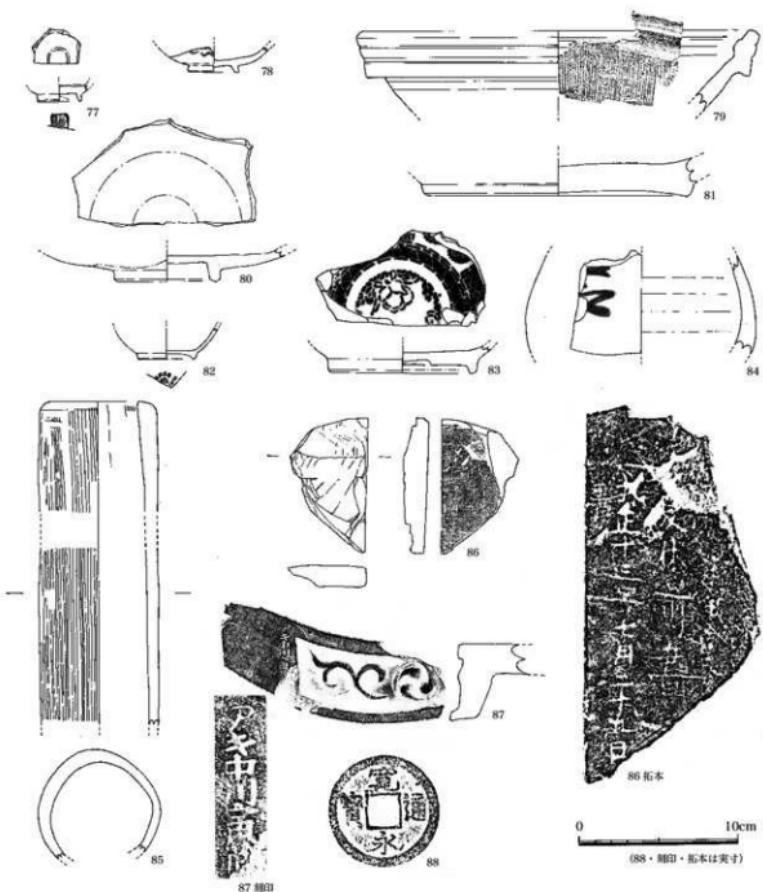


Fig.23 SD1・II層・攪乱層出土遺物実測図

(SD1: 78・81・84～86、II層: 77、攪乱層: 80・82・83・87・88、SD2・3・5、攪乱層: 79)

Tab. 1 遺構一覧表 (SK・焼土集中)

遺構名	グリッド	形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	切り合い関係	備考
I 区 - SK1	C-1・2	楕円形	1.00	0.80	15	SD2を切る。	
I 区 - SK2	C・D-1	楕円形	0.50	0.38	25	P14を切る。SD1の下面より検出。	
I 区 - SK3	C-4	隅丸方形	0.78	0.63	30	SD3の下面より検出。	柱痕径27cm
I 区 - SK4	C-5	楕円形	0.53	0.47	37	SD3の下面より検出。	
I 区 - 焼土集中1	C-4・5	楕円形	南北長 1.22	東西確認長 1.02	23		

Tab. 2 遺構一覧表 (溝)

遺構名	軸方向	検出長 (m)	幅 (m)	深さ (cm)	切り合い関係	備考
I 区 - SD1	N-48°-E	6.50	1.26 ~ 1.64	15 ~ 30	SD2・5を切り、SD3と切り合う。下面よりSK2・P12・14検出。	
I 区 - SD2	N-10°-W	14.92	0.45 ~ 0.77	26 ~ 35	SK1・SD1に切られ、P16を切る。下面より焼土集中1検出。	
I 区 - SD3	N-8°-W	19.81	0.60 ~ 1.15	25 ~ 34	SD7を切る。下面よりSK3・4検出。	
II 区 - SD4	N-10°-W	8.34	0.60 ~ 1.00	35 ~ 80	P21・28に切られ、下面よりP18・19・25・26検出。P29と切り合う。	
I 区 - SD5	N-14°-W	19.18	0.90 ~ 1.35	21 ~ 32	SD1に切られ。SD7を切る。下面よりP17・24・30・33検出。	
I 区 - SD6	N-14°-W	11.78	0.25 ~ 0.73	20 ~ 37	SD5・9と切り合う。下面よりP17検出。	
I 区 - SD7	N-8°-W	19.65	0.30 ~ 0.55	12 ~ 14	SD1・3・5・P26に切られる。	
II 区 - SD8	N-10°-W	1.50	0.75	18	SD4を切り。SD10と切り合う。	
I 区 - SD9	N-10°-W	10.50	0.35 ~ 0.50	45	SD6と切り合う。	
II 区 - SD10	N-10°-W	0.53	—	—	SD8と切り合う。	
II 区 - SD11	N-10°-W	—	0.50	13		

Tab. 3 遺構一覧表 (SB)

遺構名	梁間×柱間 (間)	梁間×柱間 (m)	柱間寸法 (平均) 梁間×柱間 (m)	軸方向	切り合い関係	時期
SBI	1×2 (又は1×2以上)	2.02×2.80 (又は2.02×4.00以上)	2.02×1.45 ~ 1.48	N-18°-W		

Tab.4 遺構一覧表（ピット）

遺構名	グリッド	形態	径 (cm)	深さ (cm)	切り合い関係	柱痕
I 区-P1	C-2	円形	40	15		
I 区-P2	C-2	円形	28	17		
I 区-P3	C-2	-	45×(21)	12	P8と切り合う。	
I 区-P4	C-2	楕円形	46×33	25		17×14
I 区-P5	C-2	円形	28	25		
I 区-P8	C-2	楕円形	38×32	31	P3と切り合う。	
I 区-P10	C-2	円形	30	15		
I 区-P12	C-1	円形	30	12	SD1の下面より検出。	
I 区-P13	C-2	-	-	11	P20と切り合う。	
I 区-P14	C-1	円形か	30×(25)	13	SK2に切られる。SD1の下面より検出。	
I 区-P15	C-4	円形	27.00	33	SD3を切る。	
I 区-P16	B-1	-	-	16	SD2に切られる。	
I 区-P17	C-5	楕円形	30×26	23		
II 区-P18	A-3	円形	20	15	SD4の下面より検出。	
II 区-P19	A-5	円形	25.00	13	SD4の下面より検出。	
I 区-P20	C-2	楕円形	30×25	22		
II 区-P21	A-5・6	楕円形	35×(25)	20	SD4を切る。P22と切り合う。	25×18
II 区-P22	A-6	楕円形	32×17	16	P21と切り合う。	
I 区-P23	C-3	円形	30	19		
I 区-P24	B-4	円形	28	14	SD5の下面より検出。	
II 区-P25	A-6	楕円形	28×24	8	SD4の下面より検出。	
II 区-P26	A-6	円形	40	16	SD4の下面より検出。	16×13
II 区-P27	A-6	円形	25	20		
II 区-P28	A-6	円形	20	8	SD4を切る。	
II 区-P29	B-5	楕円形	37×30	17	SD4と切り合う。	
I 区-P30	B-5	円形	28	8	SD5の下面より検出。	
I 区-P31	C-3	円形	35	14		
I 区-P32	C-3	-	-	38	調査区外へ広がる。	
I 区-P33	B-4	楕円形	50×43	12		
I 区-P34	C-5・6	-	-	40	SD2の下面より検出。調査区外へ広がる。	
I 区-P35	C-6	-	-	37	SD7の下面より検出。調査区外へ広がる。	

Tab.5 SBピット計測表

SB名	ピット番号	形態	径 (cm)	深さ (cm)	切り合い関係	柱痕
SB1	P1	楕円形	50×40	23		
	P2	円形	35	10		
	P3	楕円形	52×46	11		
	P5	円形	34	5		

Tab.6 遺物観察表(陶器・土器・その他)

団版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量(cm)				色調	文様・釉面・胎土	特徴(成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
1	焼土 集中1	弥生 土器	甕	13.4	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/3 断)黒灰7.5YR3/1	チャートの小繪を多く 含む	内外面ナデ。	弥生後期
2	焼土 集中1	弥生 土器	甕	15.6	—	—	—	外)にぶい橙 5YR6/4 内)にぶい赤褐 5YR5/4 断)にぶい橙 5YR6/4	チャート、風化繩の粗 粒砂、小繩を多く含む	内外面ナデ・ユビオサエ。	弥生後期
3	焼土 集中1	弥生 土器	甕	23.0	—	—	27.9	外)にぶい橙 7.5YR7/4 内)灰5Y4/1 断)灰5Y4/1	チャート、風化繩の粗 粒砂、小繩を含む	器面剥離し調査不明。胴部 外面に右下がりのカケが残る。 胴部内面上位に粘土帯 接合痕。	弥生後期
4	焼土 集中1	弥生 土器	甕	15.2	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)橙7.5YR7/6	チャート、風化繩の粗 粒砂を多く含む	口唇部面取り。口縁部内外 面ヨコナデ。外側ユビオサ エ。	弥生後期
5	焼土 集中1	弥生 土器	甕	13.2	—	—	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 黄灰2.5Y6/1	チャート、風化繩の小 繩を含む	口縁端部は下方に摘み出し ヨコナデ。内外面ナデ・ユ ビオサエ。 胴部内面上位に粘土帯接合痕。	弥生後期 外面に煤
6	焼土 集中1	弥生 土器	甕	13.8	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 内) 黒褐5Y5/1 断) 黑褐5Y5/1	チャートの粗粒砂小繩 を多く含む	外面ハケ・ナデ。口縁部内 面ヨコハケ。胴部前面右下 →左上のヘラケズリ。	弥生後期 外面に煤
7	焼土 集中1	弥生 土器	甕	15.0	—	—	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 黒灰10YR5/1	チャート、風化繩の粗 粒砂、小繩を含む	口縁部外面ハケ・ナデ。 部ユビオサエ。胴部外面に タタキ目。内面ユビオサエ・ ナデ。肩部内面上位に粘土帯 接合痕。	弥生後期
8	焼土 集中1	弥生 土器	甕	14.6	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4・ 灰褐7.5YR6/2 内) 黑褐7.5Y5/1 断) 黑褐7.5Y4/1	チャートの粗粒砂小繩 を多く含む	口縁部外面ユビオサエ・ナ デ。胴部外面タタキ目。口 縁部内面ヨコハケ。胴部内 面右→左の荒いヘラケズ リ。	弥生後期 外面に煤、 被熱帶変
9	焼土 集中1	弥生 土器	甕	10.3	—	—	—	外) 橙7.5YR6/6・ にぶい橙7.5YR7/4 断) 黄灰2.5Y5/1・ にぶい橙7.5YR7/4	チャート、風化繩の粗 粒砂、小繩を含む	口縁部外面ユビオサエ・ナ デ。胴部外面タタキ目。部 内にタタキ目を残す。胴 部内面上位に粘土帯接合痕。	弥生後期
10	焼土 集中1	弥生 土器	甕	10.2	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/3 断)にぶい橙 7.5YR7/3	チャート、粗粒砂を含 む	内外面ナデ・ユビオサエ。 胴部外面屈曲部に板状原体 の圧痕。	弥生後期
11	焼土 集中1	弥生 土器	甕	—	—	10.6	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 黒褐7.5YR5/1	チャート、風化繩の粗 粒砂、小繩を多く含む	平底。外面ハケ後ナデ。内 面ナデ。下胴部イタナデ。 内底ユビオサエ。	弥生後期
12	焼土 集中1	弥生 土器	甕	—	—	7.5	—	外) 橙7.5YR6/6 内) 黒褐10YR3/1 断) 黑褐10YR3/1	チャート、風化繩の粗 粒砂、小繩を多く含む	内外面磨耗。内外面ナデ。 平底。	弥生後期
13	焼土 集中1	弥生 土器	甕	—	—	4.6	—	外) 黑褐2.5Y3/1 断) 黄灰2.5Y4/1	チャートの繩・粗粒砂、 小繩を多く含む	突出状の底部。外面ナデ。 下位にタタキ目。内面ナデ。	弥生後期
14	焼土 集中1	弥生 土器	鉢	—	—	3.0	—	外) 橙7.5YR7/6 内) 浅橙7.5YR8/4 断) 黄灰2.5Y5/1	チャートの小繩を多く 含む	底部上げ底。内外面ユビオ サエ・ナデ。	弥生後期
15-a	I区 IV層	弥生 土器	甕	10.5	—	—	—	外) 橙7.5YR6/6 内) 黑褐褐10YR5/2 断) 黑褐10YR3/1	チャートの小繩、粗粒 砂を多く含む	外面ナデ・ユビオサエ。内 面ヘラケズリ・ナデ。上胴 部内面上位に粘土帯接合痕。	弥生後期 外面に煤、 被熱帶變
15-b	I区 IV層	弥生 土器	甕	—	—	4.6	—	外)にぶい黄橙 10YR6/4 内) 黄褐褐10YR6/2	チャートの粗粒砂、小 繩を多く含む	外面ナデ・タタキ目。 内面ユビオサエ・ナデ。	弥生後期 外面漆、 被熱帶變
16	I区 N層	弥生 土器	甕	12.0	—	—	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 黑褐10YR3/1	チャートの小繩を多く 含む	口縁部は摘み出して強く ヨコナデ。内外面ナデ。内 面に粘土帯接合痕。	弥生後期
18	SD2	土師質 土器	杯	11.1	3.0	6.6	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 内)にぶい橙 7.5YR7/4	精緻	内外面回転ナデ。	

Tab.7 遺物観察表(陶磁器・土器・その他)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)				色調	文様・繪葉・胎土	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地・生産年代・使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大径				
19	SD2	土師質土器	小皿	105	—	—	—	外) にぶい橙 75YR7/4 断) にぶい橙 75YR7/4	精緻	内外面回転ナデ。	
20	SD2 上層	須恵器	杯	—	—	—	—	外) 灰色Y6/1 断) にぶい黄橙 10YR7/4	精緻	内外面回転ナデ。	
21	SD3	縁輪陶器	椀	130	—	—	—	外) 95Y6/1・灰 オリーブY5Y6/2 断) 95Y6/1	精緻	内外面に灰オリーブ色の釉 が薄くかかる。	9~10世紀
22	SD3	須恵器	甕	—	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	砂粒をほとんど含まない	口縁部玉線状。外面ヨコナデ。頭部外縁カキ目。内 外面に自然釉。	6世紀
23	SD3	須恵器	甕	296	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	石英などの細・粗粒砂 をわずかに含む	口縁部外縁は幅1cmの粘土 帶で段状を呈する。口縁部 内外面ヨコナデ。体部外縁カ キ目ハケ。体部内面に青海 波状の当て具痕がある。	6~7世紀
24	SD3 上層	須恵器	杯蓋	笠部径 11.2	—	—	—	外) 灰N6/ 断) 灰N6/	わずかに粗粒砂を含む	丸味を帯びて立ち上がる。 縁部はケズリ気味。笠部外 縁回転ナデ。大井戸ケズリ。 内面回転ナデ。立ち上がり内外面ヨコナ デ。	6世紀後半
25	SD3	須恵器	高杯	—	—	—	—	外) 灰色25Y7/1 断) 灰白25Y7/1		杯部を欠損する。脚部内外 面ヨコナデ調整。脚部中央 に1条の凹繩、段状を呈す る。	古代
26	SD3 上層	須恵器	提板	7.8	—	—	—	外) 灰N5/ 断) 灰白5Y7/1	砂粒を含まず精緻	内外面回転ナデ。内外面に 自然釉がかかる。	6世紀 (27) 同一個体
27	SD3	須恵器	提板	—	—	—	—	外) 灰N5/ 断) 灰白5Y7/1	繩・粗粒をわずかに含 む	把手は形態化する。頭部内 外面回転ナデ。体部外縁右 →左のハラケズリ。体部内 面ナデ。	6世紀 (26) 同一個体
28	SD3	土師質土器	土鉢	残存長 (4.8)	全厚 1.3	全幅 1.3	重量 (7.0g)	にぶい橙5YR6/3		孔径0.4cm。外面ユビオサ エ・ナデ。	中世
29	SD3	土師質土器	土鉢	残存長 (4.1)	全厚 2.6	全幅 2.6	重量 (9.5g)	灰白10YR8/2	砂粒をほとんど含まない 精緻	孔径0.2cm。 外面丁寧なナデ調整。	中世
30	SD4	土師質土器	杯	10.2	5.2	6.0	—	にぶい橙75YR6/4	風化後の砂粒・小穢を 含む	内外面回転ナデ。内底ユビ オサエ。外底回転糸切り。 外面に多段のロクロ目。	中世
31	SD4	土師質土器	杯	—	—	6.1	—	外) にぶい橙 75YR6/4 断) 瓢灰75YR4/1	風化後の細・粗粒砂を 含む	内外面回転ナデ。内底ユビ オサエ。外底回転糸切り。 外面に多段のロクロ目。	中世
32	SD4	土師質土器	小皿	6.5	L7	4.8	—	にぶい橙75YR7/3	精緻	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。内底ロクロ目。	中世
33	SD4 上層	土師質土器	皿	11.4	2.2	8.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 瓢灰10YR5/1	細粒砂を多く含む	内外面回転ナデ。内面ユビ オサエ。外底回転糸切り。 外面ロクロ目。	中世
34	SD4	土師器	杯	—	—	7.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) 瓢灰10YR4/1	精緻	内外面回転ナデ。内面ロク 口目。 外底ハラ切り・ハラミガキ。	10世紀
35	SD4	須恵器	椀	—	—	6.4	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	わずかに粗粒砂を含む	貼付高台。内外面ヨコナデ。 貼付下位横方向のハラケズ リ。	
36	SD4	土師器	ミニチュア土器	4.3	3.0	3.7	—	にぶい橙75YR7/3	精緻	外面ナデ。内面ユビオサエ。	
37	SD4	須恵器	杯蓋	—	—	—	横み 径 2.8	外) 灰色Y6/1 断) 灰色Y6/1	石英地の粗粒砂をわざかに含む	扁平な宝珠摘み。内外面ヨ コナデ。	
38	SD4	須恵器	杯蓋	笠部径 12.4	—	—	—	外) 95Y6/1 断) 灰N6/	精緻	外面天井部ナデ。周縁回転 ナデ。内面回転ナデ。	6世紀後半
39	SD4	土師器	瓶	237	—	—	—	外) にぶい赤褐 5YR5/4 断) 瓢灰10YR5/1	石英・チャート・繩～ 粗粒砂を多く含む	外面ハケ後ナデ。内面中位 下→上のハラケズリ。	6世紀

Tab.8 遺物観察表(陶磁器・土器・その他)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調他)	備考(生産地・生産年代・使用根拠)
				口径	器高	底径	最大径				
40	SD6 推烹層	青花	碗	123	—	—	—	外) 灰色10Y8'/1 内) 白	口縁外) 雷文帯 外) 不明 口縁内) 二重團線 透明釉	頸部は青灰色に発色。	中国 龍泉窯系 16世紀末~17世紀初頭か。
41	SD6	青磁	碗	14.0	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y6'/2 内) 灰白10Y7'/1	外) ハラ形による雷 文帯 青磁釉	オリーブ灰色の半透明の釉。	中国 龍泉窯系 15世紀
42	SD6	青磁	碗	—	—	50	—	外) オリーブ灰 5GY6'/1 内) 灰白N8'	灰白色 精緻	高台施釉。貼付と高台内側 まで施釉し、高台には無釉。 オリーブ灰色を並びの半透 明の釉。 内底中央部に敲打痕。	中国 龍泉窯系 中世後期
43	SD6 上層	陶器	碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7'/1 内) 灰オリーブ 7SY6'/2 内) 灰白5Y7'/1	灰釉 精緻	内面に灰オリーブ色の釉。	
44	SD6	白磁	皿	—	—	72	—	外) 灰色10Y7'/1 内) 灰色10Y8'/1	白磁釉	底部平底。 灰白色の釉。	中国 13世紀後半~ 14世紀前半
45	SD6 上層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外) 灰白10Y7'/1· 灰褐7SYR5'/2 内) 灰褐7SYR5'/2· 灰白2SY7'/1	焼締め	口縁端部凹状。内外面回転 ナデ。体部内面擦り目。	備前 16世紀前半
46	SD6	陶器	擂鉢	336	—	—	—	外) 灰赤10R4'/2 内) 赤灰25YR5'/1	焼締め	口縁部内外面回転ナデ。口 縁部は丸く出来る。体 部内外面回転ナデ。口縁部 外面に自然釉。	備前 15世紀末
47	SD6	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外) 黄灰25Y5'/1· 黄灰25Y6'/1 内) 灰白5Y7'/1		口縁部外面に重ね焼き痕。 体部外面回転ナデ。内面回 転ナデ後擦目。	備前 14世紀前半
48	SD6 上層	須恵器	捏鉢	—	—	—	—	外) 9GY5'/1· 灰色N7/ 内) 灰色N7/ 内) 灰色N7/	細粒砂を含む やや粗い	口縁部内外面回転ナデ。体 部外面回転ナデ。内面ナデ。 口縁部外面に自然釉。	東播系
49	SD6	土師質土器	杯	—	—	56	—	にぶい橙7SYR7/3	精緻	内外面回転ナデ。外底回転 糸切り。内面口クロ目。	中世
50	SD6 上層	土師質土器	土鉢	全長 4.6	全厚 1.5	全幅 15	重量 119g	黄灰25Y6'/1	精緻	孔径0.4cm。外側ナデ。	
51	SD6 上層	白磁	碗	14.6	—	—	—	外) 灰白10Y7'/1 内) 灰白5Y8'/1	白磁釉	口縁部玉縁状。灰白色を帶 びる半透明の釉。	中国 12世紀
52	SD6	白磁	碗	13.0	—	—	—	外) 灰色7SY7'/1 内) 灰色N8'/	白磁釉 灰白色 精緻	口縁部玉縁状。灰白色を帶 びる半透明の釉。	中国 12世紀
53	SD6 床	白磁	碗	—	—	107	—	内) 灰色5Y7'/2 内) 灰色5Y8'/1	白磁釉	高台断面台形状。外下面位 と高台無釉。灰白色を帶び る半透明の釉。	中国 12世紀
54	SD6	須恵器	杯	—	—	108	—	外) 灰白N7/ 内) 灰白7SY7'/1	精緻	輪高台を貼付。体部内外面 回転ナデ。外底ケツリ。高 台周縁回転ナデ。内底ナデ。	8世紀初頭
55	SD6 上層	須恵器	杯	—	—	80	—	外) 灰白N7/ 内) 灰白N7/	長石、チャートの細 粒砂	輪高台を貼付。内底ナデ。 外底ヘラケズリ。高台周縁ナデ。	7世紀
56	SD6	須恵器	鉢	—	—	11.6	—	外) 灰色25Y7'/1 内) 灰色25Y7'/1	精緻	内外面ヨコナデ。 内面ユビオサエ。	
57	SD6	須恵器	椎又は 盞	—	—	—	—	外) 灰N6/ 内) 灰N6/	細粒砂を含む	肩部外面に沈線。外面上半 回転ナデ。胴部最大径以下 ケズリ。内面エオサエ・ ナデ。	6世紀
58	SD6 上層	須恵器	杯	受部径 11.6	—	—	14.0	外) 灰N6/ 内) 灰N6/	精緻	内外面回転ナデ。	6世紀後半~ 7世紀初頭
59	SD6 上層	須恵器	甕	15.5	—	—	—	外) 灰5Y5'/1 内) 灰白25Y7'/1	精緻	瓶部外面に1条の沈線。 口縁部内外面回転ナデ。 口縁部内面に自然釉。	6世紀
60	SD6	土師器	甕	15.0	—	—	—	外) 都5Y8'/6 内) 黄褐10YR6'/2 内) にぶい橙 7SYR7/4	チャート、風化塵の細 粒粒砂を含む	外面ユビオサエ・ナデ。 内面ナデ。	6世紀
63	SD6	須恵器	杯蓋	笠部径 12.7	40	天井部 径32	—	外) 灰N6/ 内) 灰N6/		外面周縁回転ナデ。天井部 ケズリ。内面回転ナデ。	6世紀

Tab.9 遺物観察表(陶磁器・土器・その他)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量(cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・ 使用根拠)
				口径	器高	底径	最大径				
64	SD7	須恵器	杯蓋	笠部径 10.7	—	—	—	外) 灰白Y6/1 内) 灰白Y5/4		外面凹縁回転ナデ、天井部 回転ケズリ。内面回転ナデ。	6世紀
65	SD8	須恵器	提瓶	—	—	—	—	外) 灰白25Y7/1 内) 灰白25Y7/1		内外面ユビオサエ・ナデ。	6世紀
66	SD3・5 ~7 上層	須恵器	杯	受部径 12.2	—	—	14.8	外) 灰N6/ 内) 灰N6/	精緻	外面上位回転ナデ、下位回 転ケズリ。内面回転ナデ。	6世紀
67	P27	須恵器	杯	受部径 10.2	—	—	12.5	外) 灰N6/ 内) 灰N6/	精緻	内外ヨコナデ調整。	6世紀後半
68	SD11	須恵器	盃	18.6	—	—	—	外) 灰N5/ 内) 灰N5/	精緻	口縁部外側に段。口縁部内 外面回転ナデ。腹部外側に 縦方向の粗いハケ。	6世紀
69	SD2・ 3・5	須恵器	高杯	—	—	6.7	—	外) 灰N6/ 内) 灰N6/	精緻	高杯の押部。内外面回転ナ デ。	
70	P22	土師器	甕	17.5	—	—	—	外) 灰Y86/6 内) 灰灰25Y5/1	チャート他の細・粗粒 を含む	外面ヨコナデ。外面ユビ オサエ。	6世紀
71	試掘 TP3 Ⅲ・ Ⅳ層	土師質 土器	鍋 三足鍋	—	—	—	—	外) にぶい檻 7.5YR6/3 内) にぶい檻 7.5YR7/3	石英の繊維・粗粒砂を 多く含む。	三足を貼付。外面ユビオサ エ・ナデ。	14世紀 外面に煤
72	I区 II層	青花	碗	—	—	5.4	—	外) 明暎灰10GY8/1 内) 白	唐草文か 外) 唐草文か 二重圓綻 見込み	高台施釉。	中国 景德鎮窯系 16世紀か
73	I区 II層	青磁	皿 端反形	11.4	—	—	—	外) にぶい黄25Y6/3 内) 灰白25Y8/1	青磁釉	釉は酸化焼成味でにぶい 黄色に発色する。	中国 龍泉窯系
74	SD1 搅乱	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外) 灰灰75YR5/1・ にぶい檻25YR6/4 内) 灰灰10YR5/1 にぶい赤褐 25YR5/3	燒紬め	口縁部外側回転ナデ。体部 ヨコナデ。体部内面回転ナ デ後揚目。	隋前 15世紀末
75	SD1 搅乱	土師器	高杯	—	—	—	—	外) にぶい檻 7.5YR7/4 内) 灰灰10YR4/1	石英・チャート・風化 繊維の細・粗粒砂を含む	外面ナデ。内面わずかにヘ ラケズリの痕跡あり。杯部 は接合部から剥離欠損す る。	5~6世紀
76	SD1	須恵器	提瓶	—	—	—	—	外) 灰Y6/1 内) 灰Y6/1	石英他の細・粗粒砂を 多く含む。	外面右→左へのヘラケズ リ。 内面ユビオサエ・ナデ。	6世紀
77	I区 II層	青花	小杯	—	—	2.6	—	外) 灰白75Y8/1 内) 白	高台内) 角棒内「福」 見込み蛇ノ目釉剥ぎ。		中国 景德鎮窯系
78	試掘 TP1 SD1	陶器	小碗 半球形	—	—	3.1	—	外) 灰白75Y7/2 内) 灰白N8/	外) 鉄絵 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる 透明の釉。	京都・信楽系 18世紀中葉
79	SD2・3・ 5・ 搅乱	陶器	擂鉢	24.6	—	—	—	外) 暗赤褐色10R3/2 内) 暗赤褐色10R3/2 内) 赤褐10R5/3		口縁部外側に2条の凹線。 体部外側回転ケズリ。体部 内面回転ナデ後揚目。	隋前 18~19世紀
80	II区 搅乱	陶器	皿	—	—	6.1	—	外) 灰オリーブ 57Y2・灰白57Y1 内) 灰白57Y2・ 灰白5Y8/1 内) 灰白57Y/1	灰釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎし白土 を研磨塵り。高台無釉。灰 黄色を帯びる半透明の釉。	肥前又は肥前系 18~19世紀
81	SD1 搅乱	陶器	不明	—	—	16.3	—	外) 灰褐75YR5/2 内) 灰白5Y8/1 内) 灰褐75YR5/1	外) 不明 内) 灰白色の釉	外面下位と外底無釉。内面 に灰白色的白滑した釉を厚く かける。内底に径0.9cmの 目痕あり。	近世末~近代
82	I区 搅乱	磁器	小碗	—	—	3.6	—	外) 白 内) 白	透明釉	高台内に赤の釉下彩による 露頭。 「東洋陶器 □KAISHA」。	近現代
83	I区 搅乱	磁器 染付	小皿	—	—	8.8	—	外) 白 内) 白		酸化コバルトによる文様。 蛇ノ目凹形高台。	19世紀後葉

Tab.10 遺物観察表（陶磁器・土器・その他）

団版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・ 使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
84	SD1 複乱	陶器	徳利	—	—	—	14.4	外) 灰白2.5Y7/1 内) 灰褐5YR4/2 底) 灰白10YR7/1	外) 酸化コバルトによる文字・灰釉 内) 鉄釉	内面ロクロ目。灰釉は透明 釉で貫入が入る。	近代
85	SD1 複乱	陶器	土管	径 7.8	—	厚さ 0.7 ~ 1.0	厚さ 7.5YR7/4 底) にぶい橙 7.5YR7/4	外) にぶい橙 7.5YR7/4 底) にぶい橙 7.5YR7/4	焼締め 石英・長石・金雲母の 織・粗粒砂を多く含む	外面タテ方向ハケ調整。 内面口縁部付近にわざかに ヨコ方向ハケ、以下はナデ 調整。	近世末～近代

Tab.11 遺物観察表（石製品・金属製品）

団版 番号	出土 地点	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	色調	特徴・使用痕他	
				全長	全厚	全幅				
17	II区 表塚	石器	石斧	[14.6]	25	6.8	[300.0]	灰N4/	頁岩製。	
61	SD5	鉄製品	不明	—	—	—	[69.0]			
62	SD5	鉄製品	不明	—	—	—	[73.1]			
86	SD1 複乱	石製品	硯	[8.5]	15	[4.9]	62.1		粘板岩製。海部は残存する。底部の表面 は剥離する。 外底に釘彫り「□体前齊大正十三年七月 二十九日書」。	

※法量・重量とも【】は残存分。金柄製品で書きみられるものも【】表記した。

Tab.12 遺物観察表（瓦）

団版 番号	出土 地点	種類	法量 (cm)				色調	胎土 (含有鉱物・粒度)	特徴 (成形・調整)	備考
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚 九瓦厚	外径				
87	I区 複乱	軒棟瓦 右棟瓦	4.8	31	1.8	外) 灰N4/ 断) 灰N7/			中心飾りは三巴文。両側に 均整唐草文。	「アキ中川寅〇」 鉢印あり

Tab.13 遺物観察表（古銭）

団版 番号	出土 地点	種類	法量 (cm)			重量 (g)	裁種・鑄造年代他	備考	
			外径	穿孔	厚さ				
88	II区 複乱	寛永通宝	24	0.6	0.1	1.9			

写 真 図 版



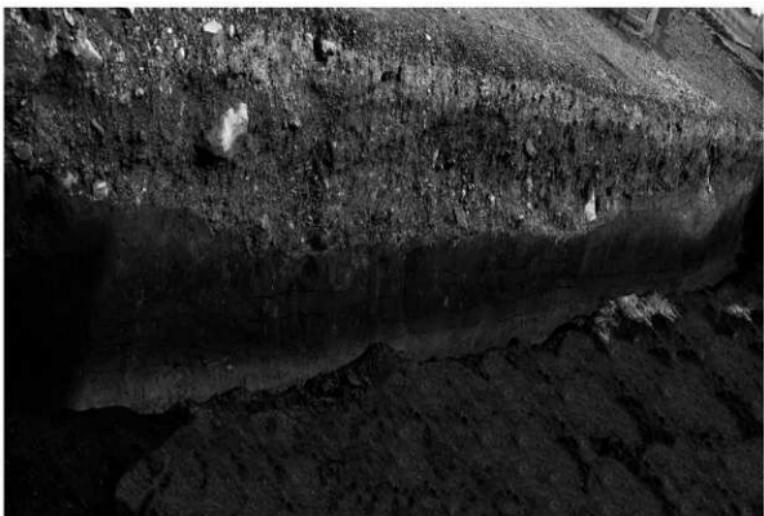
調査前風景（南から）



完掘状況（北から）



完掘状況（南から）



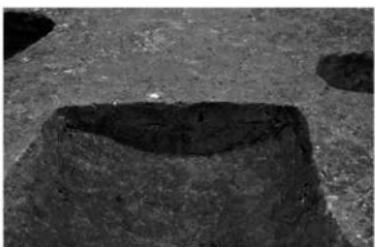
調査区東壁（北西から）



焼土集中1 遺物出土状況（西から）



焼土集中1 土層断面（南から）



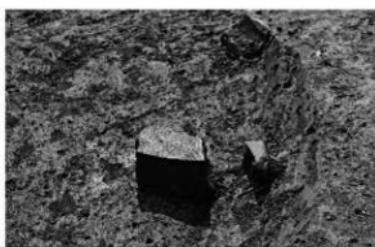
SD2 土層断面（南から）



SD3・5 土層断面（南から）



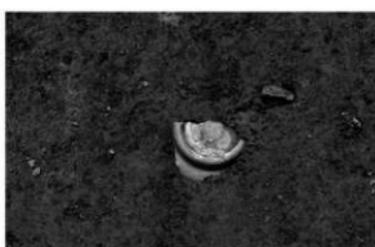
SD4・8 土層断面（南から）



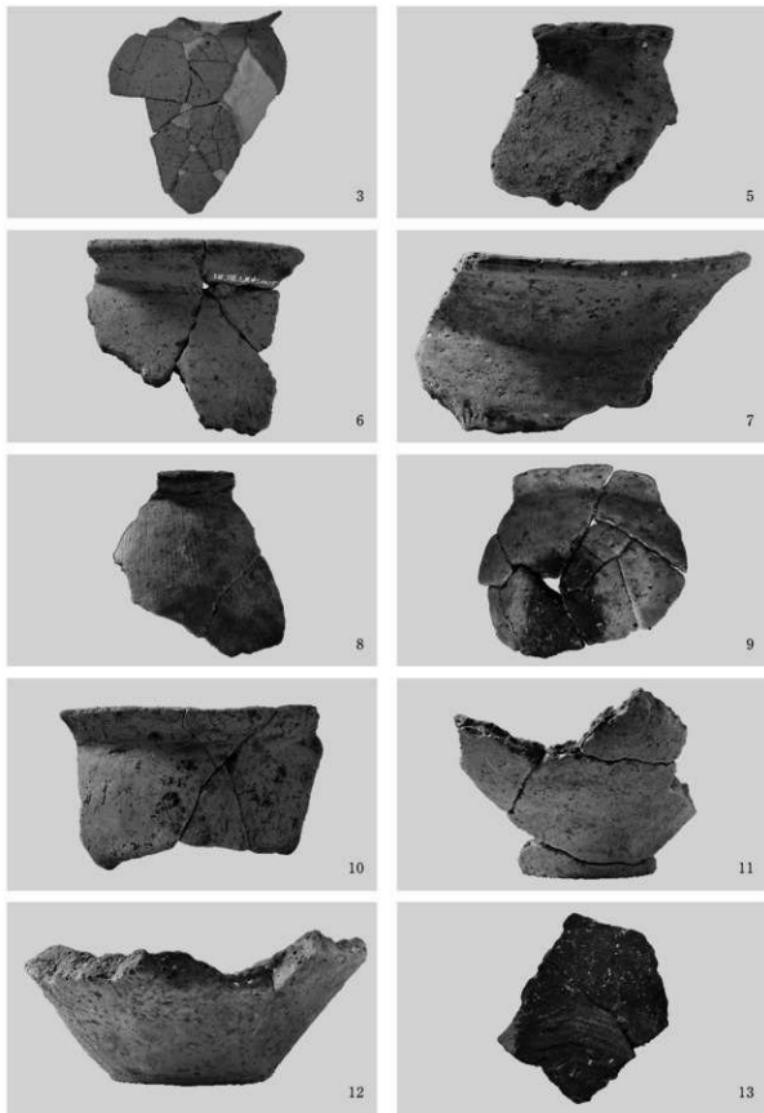
SD3 遺物出土状況



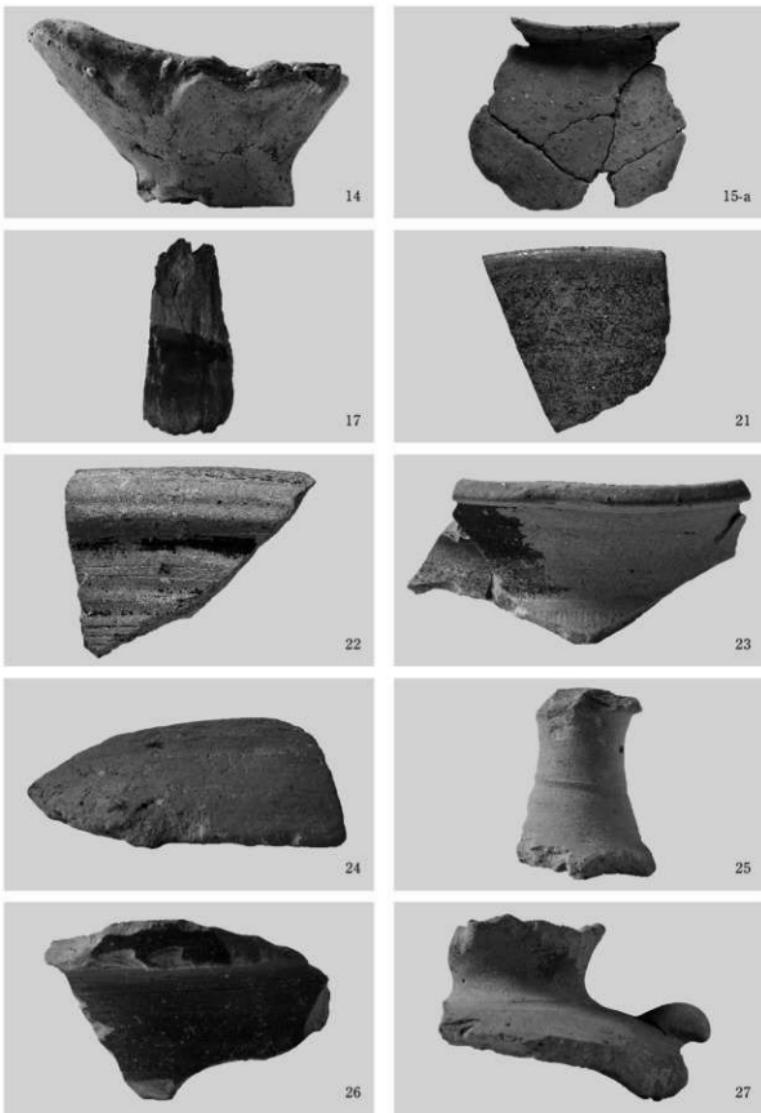
SD3 遺物出土状況



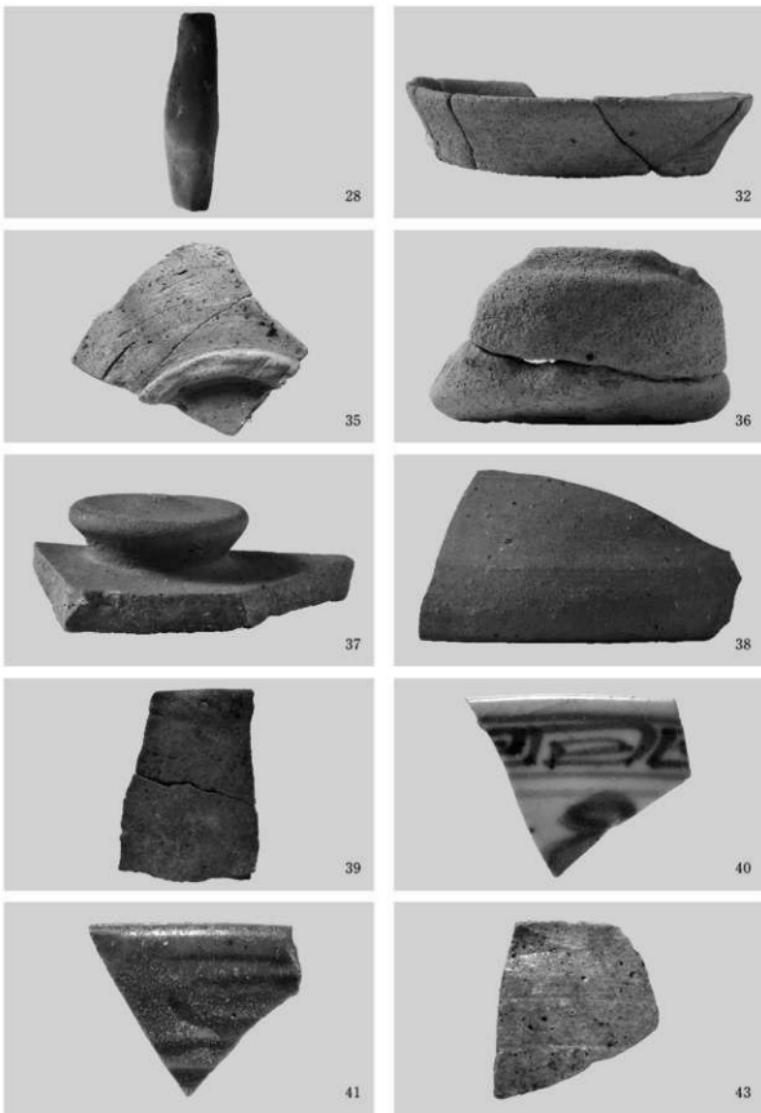
SD5 遺物出土状況



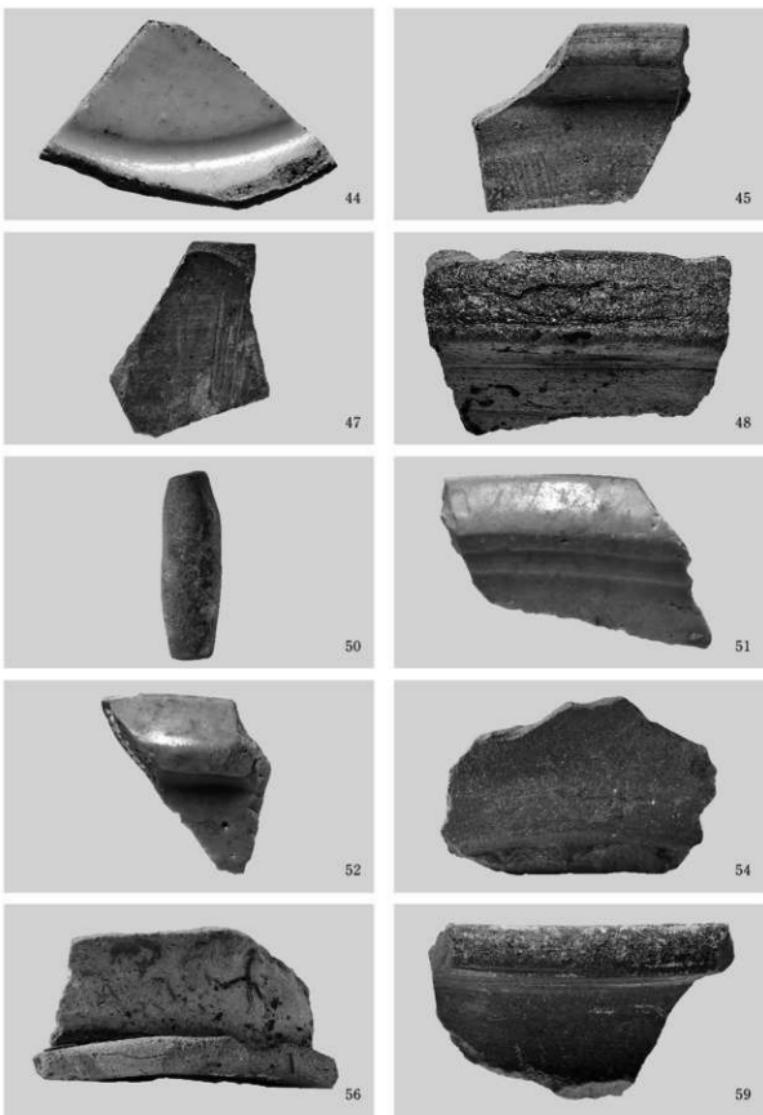
燒土集中 1 出土遺物



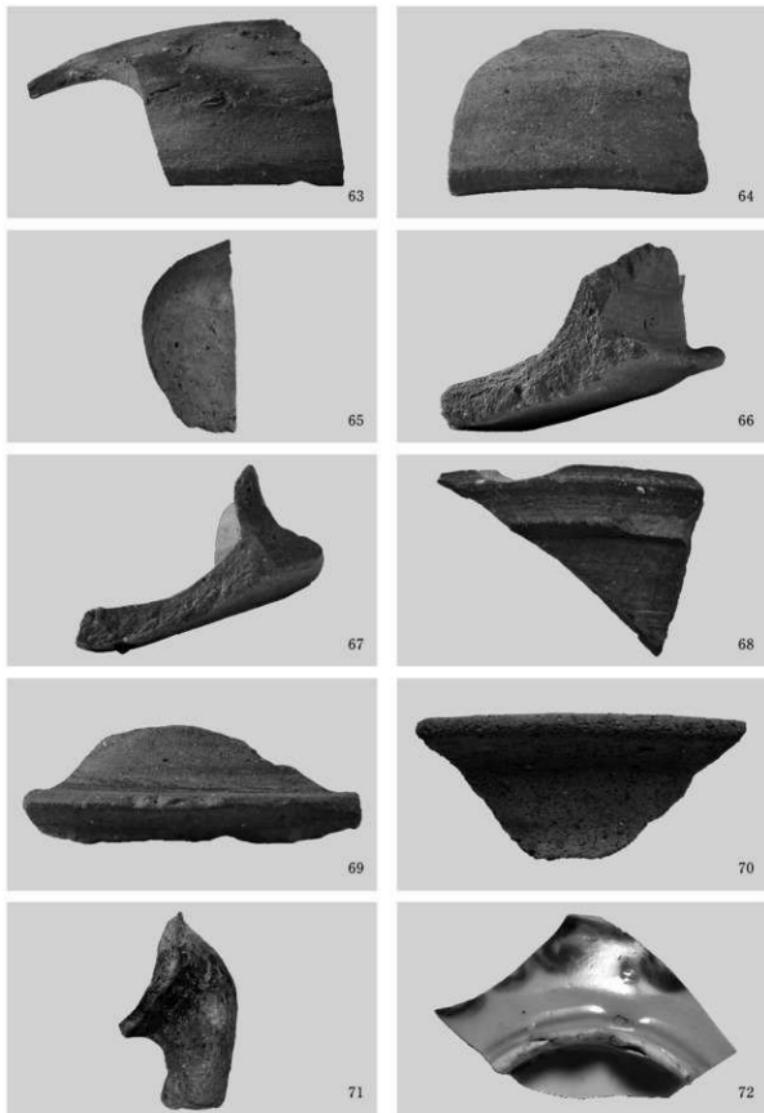
焼土集中 1・I 区 N 層・II 区表採・SD3 出土遺物



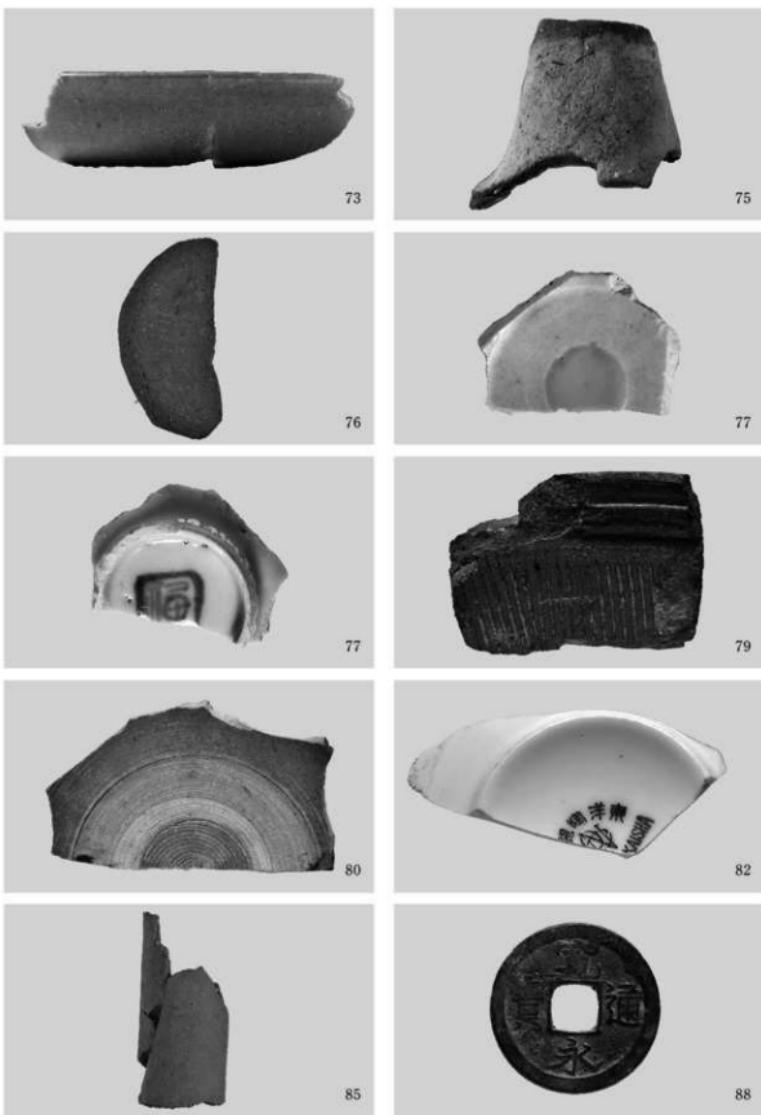
SD3 ~ 5 出土遺物



SD5 出土遺物



SD2 ~ 8 · 11 · P22 · 27 · TP3 III · N層 · I区 II層出土遺物



I 区 II 层 · SD1 搅乱 · SD2 · 3 · 5 搅乱 · I 区搅乱 · II 区搅乱出土遗物

報告書抄録

ふりがな	にしふんますいせいぐん							
書名	西分増井遺跡群							
副書名	医療施設増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高知市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第46集							
編著者名	西村一法・浜田恵子							
編集機関	高知市							
所在地	〒781-8010 高知県高知市桟橋通4丁目14-3（自由民権記念館）TEL088-832-7277							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしふんますいせいぐん 西分増井遺跡群	こうちけんこうち 高知県高知市 はるのちょうにしふん 春野町西分 2027-3	39201	340015	33度 29分 57秒	133度 29分 46秒	2019年 5月7日 ～ 5月9日 2019年 6月17日 ～ 7月17日	27m ² 215m ²	医療施設 増築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西分増井遺跡群	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世 近代	掘立柱建物 土坑 溝 ピット	土器・陶磁器 石製品 古錢 瓦 貿易陶磁器	弥生時代の焼土集中、古墳時代後期～中世にかけての掘立柱建物・土坑・溝・ピット、近世～近代にかけての溝を検出した。			

高知市文化財調査報告書 第46集

西分増井遺跡群

－医療施設増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2022年3月

発行 高知市

〒780-8571 高知県高知市本町5丁目1-45

民権・文化財課

電話088-832-7277

印刷 有限会社 西村謄写堂